

東前原遺跡

(第8地点第2次)

区画道路6-22号外1路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

水戸市教育委員会

ごあいさつ

那須岳を水源とする那珂川右岸の台地上に営まれている東前原遺跡は、水戸市域の東側に位置しています。本遺跡の周辺には、文献に残る最古の貝塚である国指定史跡「大串貝塚」をはじめ、6世紀後半から6世紀末頃にかけて築造された首長墓群とみられる北屋敷古墳群、奈良・平安時代に交通の要衝として機能した平津駅家の関連集落と考えられている梶内遺跡など、多くの重要遺跡が残されており、古くから政治・文化の中心地域のひとつとして繁栄してきたと考えられています。

近年、東前原遺跡が位置する東前町周辺は、区画整理事業に伴い宅地化が急速に進んでおり、周辺に位置する遺跡の様相も大きく様変わりしています。埋蔵文化財は、文字がない時代の社会をはじめ、文字や文献が存在する時代であっても、文献に記されることのない地域社会の歴史を雄弁に物語る貴重な歴史資料のひとつです。また、埋蔵文化財はその性質上、開発などにより一度壊されてしまうと、二度と原状に復すことができないため、私たちひとりひとりが大切に保存しながら後世へと伝えていかなければならない貴重な財産です。本市教育委員会といたしましては、その意義や重要性を踏まえ、開発事業との調和を図りながら、文化財の保護・保存に努めているところです。

この度の区画整理事業に伴う発掘調査では、旧石器時代、奈良・平安時代、中世・近世にかけての遺構や遺物が確認され、特に古代の竪穴建物跡からは、水戸市木葉下窯跡群の製品とみられる古代のやきもの等が多数出土しました。

これらの遺構・遺物は、東前原遺跡における土地利用の移り変わりを復元するうえで重要な資料であるとともに、近接する小原遺跡や梶内遺跡、那賀郡衛正倉別院と推定される大串遺跡など、東前町近辺に存在する古代遺跡との関連性を考えるうえでも大きな手がかりとなるものです。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する保護・活用の意識の高揚や郷土愛の育成へと繋がることを願い、豊かな地域史の一端を復元するための学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

末尾ながら、今回の調査実施にあたり、多大なる御理解と御協力を賜りました近隣住民の皆様方、並びに種々の御指導・御助言を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます、ごあいさつといたします。

平成28年3月

水戸市教育委員会
教育長 本多清峰

例 言

1. 本書は水戸市東前町に所在する東前原遺跡において、区画道路6-22号外1路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴い実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は水戸市の委託を受けて、茨城県教育委員会および水戸市教育委員会の指導のもと有限会社 日考研茨城が主体となって実施した。

3. 遺跡の所在地、調査面積、調査期間は以下のとおりである。

所在地 茨城県水戸市東前町1118-1, 1118-2, 1119-1, 1119-3, 1120, 1122-1番地

調査面積 677.0㎡

調査期間 平成27年12月22日～平成28年1月20日

4. 発掘調査組織は下記のとおりである。

本多 清峰	水戸市教育委員会教育長
事務局 中里誠志郎	水戸市教育委員会事務局教育部長
飯村 博史	同文化課埋蔵文化財センター所長
米川 暢敬	同文化財主事
太田有里乃	同主事(調査担当者)
昆 志徳	同埋蔵文化財専門員
丸山優香里	同埋蔵文化財専門員
下山はる奈	同埋蔵文化財専門員
菅谷 瑛奈	同嘱託員(公開活用担当)
杉山 洋子	同嘱託員(庶務担当)

調査員 大淵 淳志(有)日考研茨城

5. 整理作業は、水戸市教育委員会の指導のもとに、小川和博・大淵淳志・遠藤啓子・大淵由紀子・大野美佳(以上(有)日考研茨城)が行った。
6. 本書の編集は、水戸市教育委員会の指導・助言のもと、小川和博が行った。
7. 本書の執筆は、太田有里乃・米川暢敬・橋本勝雄・小川和博・大淵淳志・遠藤啓子・大淵由紀子・大野美佳があたった。文責はそれぞれ文末に記載した。
8. 遺構および遺物の写真撮影は大淵淳志・小川和博が行った。
9. 記録および出土遺物は、水戸市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御指導・御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表す次第です(敬称略)。

茨城県教育庁文化課、公益財団法人茨城県教育財団、ひたちなか市埋蔵文化財センター、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場、佐藤政則、橋本勝雄、佐々木義則、比毛君男

11. 調査には以下の者が参加した。

大谷和枝・岡崎稔・小野豊・海老原龍生・鈴木利勝・鳥崎清子・中村薫・中島貞雄・沼田久男

凡 例

1. 本道跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、 $X = -37,660\text{m}$ 、 $Y = 62,610\text{m}$ の交点を基準とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。
調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A-1区」のように呼称した。
2. 方位は座標北を示す。標高は海拔標高である。
3. 本文中の色調表現は『新版標準土色帖』2008年版(農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)を用いた。
4. 掲載した図面の基本縮尺は以下の通りである。
道構図 調査区全体図 1/400 竪穴建物跡・掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡・土坑・ピット・ピット群・土層図 1/80 竪穴建物跡カマド 1/50 基本土層図 1/40
遺物図 旧石器時代石器 2/3 土師器・須恵器・陶磁器・土師質土器・瓦質土器・鉄製品 1/4
なお、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールをもってその縮尺率を表した。
5. 掲載図中のスクリーン・トーン及び記号は以下に示す通りである。
道構図  カマド袖  道構断面  赤城-鹿沼バミス層(Ag-Kg)
遺物図  須恵器断面  陶磁器断面  黒色処理
遺物 道構図内における●印はすべての種類の遺物を表示した。
6. 実測図・本文中に用いた略記号は以下を示す。
SI：竪穴建物跡 SB：掘立柱建物跡 SE：井戸跡 SD：溝跡 SK：土坑 SP：ピット
P：竪穴建物跡内柱穴・ピット群柱穴 K：攪乱 PG：基本土層観察用テストピット
7. 遺物観察表の表記については、次のとおりである。
(1)計測値の単位はcm、gで示した。法量に付した()は現存値、[]は復元値を、「—」は計測及び復元不可を示す。
(2)遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表に記した番号と同一とした。
8. 道構の「主軸」は、カマド設置位置もしくは最長の軸線とし、主軸方向は、その他の道構の長軸方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10° -E)。

本文目次

ごあいさつ

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3節 東前原遺跡における既往の調査	7
第3章 検出された遺構と遺物	10
第1節 調査の概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 旧石器時代の遺物	10
第4節 竪穴建物跡	11
第5節 掘立柱建物跡	23
第6節 井戸跡	27
第7節 溝跡	28
第8節 土坑	31
第9節 ビット	36
第10節 ビット群	37
第4章 まとめ	40

写真図版

報告書抄録

付表

挿図目次

第1図	東前原遺跡第8地点第1次調査試掘トレンチ配置図と本発掘調査範囲の位置(1:1,500).....	1
第2図	調査区設定図.....	3
第3図	遺跡の位置(○が東前原遺跡, 1:25,000 明治18年7月第一軍管地方迅速測図).....	4
第4図	周辺の遺跡(1:25,000).....	5
第5図	東前原遺跡における既往の調査地点(1:5,000).....	8
第6図	遺構配置図.....	9
第7図	基本土層図.....	10
第8図	旧石器時代の石器.....	11
第9図	第1号竪穴建物跡SI01実測図.....	12
第10図	第1号竪穴建物跡SI01カマド実測図.....	12
第11図	第1号竪穴建物跡SI01出土遺物.....	13
第12図	第2号竪穴建物跡SI02実測図.....	14
第13図	第2号竪穴建物跡SI02カマド実測図.....	14
第14図	第2号竪穴建物跡SI02出土遺物.....	15
第15図	第3号竪穴建物跡SI03実測図.....	16
第16図	第3号竪穴建物跡SI03出土遺物.....	16
第17図	第4号竪穴建物跡SI04実測図.....	17
第18図	第4号竪穴建物跡SI04出土遺物.....	17
第19図	第5号竪穴建物跡SI05実測図.....	19
第20図	第5号竪穴建物跡SI05カマド実測図.....	20
第21図	第5号竪穴建物跡SI05出土遺物.....	21
第22図	第6号竪穴建物跡SI06実測図.....	22
第23図	第6号竪穴建物跡SI06出土遺物.....	22
第24図	第1～4号掘立柱建物跡SB01～04実測図.....	24
第25図	第5～7号掘立柱建物跡SB005～07実測図.....	26
第26図	第1号井戸跡SE01実測図.....	27
第27図	第1号井戸跡SE01出土遺物.....	27
第28図	第2号井戸跡SE02実測図.....	27
第29図	第1号溝跡SD01実測図.....	29
第30図	第1号溝跡SD01出土遺物.....	29
第31図	第2号溝跡SD02実測図.....	30
第32図	第2号溝跡SD02出土遺物.....	30
第33図	第1号土坑SK01実測図.....	32
第34図	第1号土坑SK01出土遺物.....	32
第35図	第2号土坑SK02実測図.....	32
第36図	第2号土坑SK02出土遺物.....	32
第37図	第3号土坑SK03実測図.....	32
第38図	第4号土坑SK04実測図.....	32
第39図	第4号土坑SK04出土遺物.....	32
第40図	第5号土坑SK05実測図.....	34
第41図	第5号土坑SK05出土遺物.....	34

第42図	第6・7号土坑SK06・07実測図	34
第43図	第7号土坑SK07出土遺物	34
第44図	第8号土坑SK08実測図	34
第45図	第9号土坑SK09実測図	36
第46図	第9号土坑SK09出土遺物	36
第47図	ビット実測図	37
第48図	ビット群実測図	38
第49図	ビット群出土遺物	38
第50図	東前原遺跡(第8地点第2次)における土地利用の変遷(1:800)	43

表目次

第1表	主要な周辺遺跡一覧
第2表	東前原遺跡における既往の調査一覧
第3～8表, 第16～25表	出土土器観察表
第9表～第15表, 第26表	計測値表
第27表～第29表	土器・石器・鉄製品集計表

写真図版目次

PL. 1	1. 航空写真(北から) 2. 航空写真(北から)
PL. 2	1. 調査区遠景(北から) 2. 調査区近景(東から)
PL. 3	1. 調査区完掘状況(西から) 2. 基本層序PG 1(南から)
PL. 4	1. 第1号竪穴建物跡(SI01)完掘状況(南から) 2. 第1号竪穴建物跡(SI01)カマド完掘状況(南から) 3. 第1号竪穴建物跡(SI01)遺物出土状況
PL. 5	1. 第2号竪穴建物跡(SI02)完掘状況(南から) 2. 第2号竪穴建物跡(SI02)カマド完掘状況(南から) 3. 第2号竪穴建物跡(SI02)遺物出土状況
PL. 6	1. 第3号竪穴建物跡(SI03)完掘状況(南から) 2. 第3号竪穴建物跡(SI03)遺物出土状況 3. 第3号竪穴建物跡(SI03)遺物出土状況
PL. 7	1. 第4号竪穴建物跡(SI04)完掘状況(南から) 2. 第5号竪穴建物跡(SI05)完掘状況(東から) 3. 第5号竪穴建物跡(SI05)遺物出土状況
PL. 8	1. 第6号竪穴建物跡(SI06)完掘状況(東から) 2. 第1号掘立柱建物(SB01)完掘状況(南から) 3. 第2号掘立柱建物(SB02)完掘状況(西から)
PL. 9	1. 第3号掘立柱建物(SB03)完掘状況(西から) 2. 第4号掘立柱建物(SB04)完掘状況(南から) 3. 第5号掘立柱建物(SB05)完掘状況(西から)
PL. 10	1. 第1号井戸跡(SE01)完掘状況(南から) 2. 第2号井戸跡(SE02)完掘状況(北から) 3. 第1号溝跡(SD01)完掘状況(南から)
PL. 11	1. 第2号溝跡(SD02)完掘状況(南から) 2. 第1号土坑(SK01)完掘状況(東から) 3. 第2号土坑(SK02)完掘状況(東から)
PL. 12	1. 第3号土坑(SK03)完掘状況(東から) 2. 第4・5・8号土坑(SK04・05・08)完掘状況(北から) 3. 第4号土坑(SK04)完掘状況(北から)
PL. 13	1. 第5号土坑(SK05)完掘状況(南から) 2. 第5号土坑(SK05)遺物出土状況

3. 第6号土坑(SK06)完掘状況(東から)
- PL. 14 1. 第7号土坑(SK07)完掘状況(東から) 2. 第8号土坑(SK08)完掘状況(南から)
3. 第9号土坑(SK09)完掘状況(南から)
- PL. 15 1. 第9号土坑(SK09)遺物出土状況 2. ビット群完掘状況(西から)
- PL. 16 1. 第6号竪穴建物跡(SI06)出土旧石器 2. 第1号竪穴建物跡(SI01)出土遺物
3. 第1号竪穴建物跡(SI01)出土遺物 4. 第1号竪穴建物跡(SI01)出土遺物
- PL. 17 1. 第2号竪穴建物跡(SI02)出土遺物 2. 第2号竪穴建物跡(SI02)出土遺物
3. 第2号竪穴建物跡(SI02)出土遺物
- PL. 18 1. 第3号竪穴建物跡(SI03)出土遺物 2. 第4号竪穴建物跡(SI04)出土遺物
3. 第5号竪穴建物跡(SI05)出土遺物
- PL. 19 1. 第5号竪穴建物跡(SI05)出土遺物 2. 第5号竪穴建物跡(SI05)出土遺物
3. 第6号竪穴建物跡(SI06)出土遺物
- PL. 20 1. 第1号井戸跡(SE01), 第1・2号溝跡(SD01・02)出土遺物
2. 第1・2・4・7号土坑(SK01・02・04・07)出土遺物
- PL. 21 1. 第5号土坑(SK05)出土遺物 2. 第9号土坑(SK09)出土遺物 3. ビット(Pit)群出土遺物

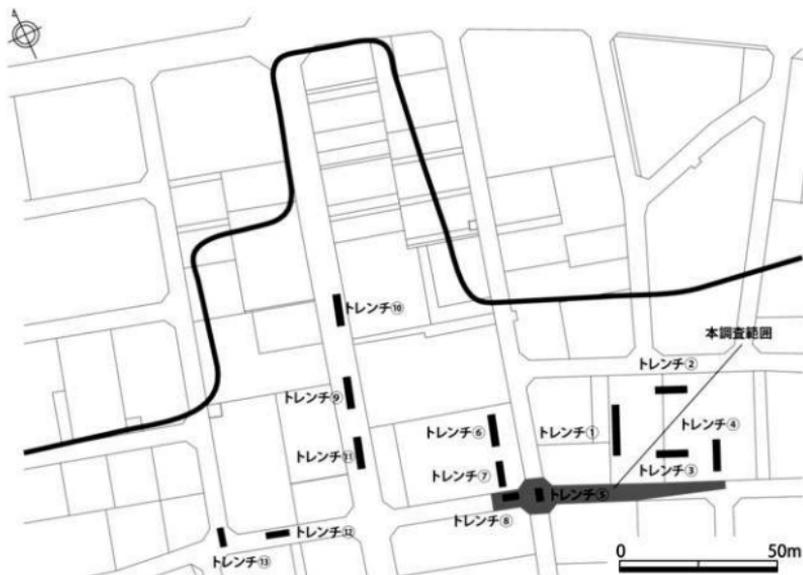
第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯

平成27年6月10日付で、土地区画整理事業に伴い、水戸市長（都市計画部市街地整備課東前地区開発事務所扱、以下「事業者」という。）から、水戸市教育委員会（以下「市教委」という。）教育長あて、「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」（教理第763号）が提出された。

開発予定地である、水戸市東前町1120-4・6・9・10・12・15～17は、周知の埋蔵文化財包蔵地「東前原遺跡」に該当していることから、平成27年6月16～19日に試掘調査を実施した。なお、開発予定地のうち埋蔵文化財包蔵地の範囲外とされていた箇所にも遺構の分布が想定されたことから、当該箇所にも調査区（第1図トレンチ⑩）を設定した。当該試掘調査（東前原遺跡第8地点第1次調査）では、計13本の調査区を設定した（第1図トレンチ①～⑬）。調査の結果、ほぼ全ての調査区から竪穴建物跡や溝跡をはじめとする多数の遺構・遺物を検出し、その旨事業者あて回答した（教理第764号）。なお、試掘調査により遺跡の範囲がさらに北側の台地縁まで広がることを確認したため、後日に東前原遺跡の範囲変更を行った。

以上の調査結果を「茨城県埋蔵文化財発掘調査等取扱い基準」と照合・検討した結果、原則Ⅲ「恒久的な建造物の設置により相当期間にわたり埋蔵文化財と人との関係が絶たれ、当該埋蔵文化財が破損したに等しい状態となる場合」に該当すると判断された。そのため、市教委は、現状保存に向け事業者と協議を重ねたが、工事による影響は不可避であり、埋蔵文化財の現状保存は極めて困難であるとの結論に達した。このため市教委は、事業者から提出のあった文化財保護法第94条第1項に基づく通知について、次善の策として記録保存を目的とした本発掘調査を実施すべき旨の意見書を付して茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）教育長あて進達した（教理第765号）。



第1図 東前原遺跡第8地点第1次調査試掘トレンチ配置図と本発掘調査範囲の位置（1：1,500）

この通知に対し、県教委教育長から平成27年7月15日付け文第1011号にて、工事着手前に発掘調査を実施すること、また、調査の結果重要な遺構が確認された場合には、その保存について別途協議を要する旨の指示・勧告があった。

これを受けて、市教委は工事対象地のうち、埋蔵文化財が確認された面積677㎡を調査対象とし、平成27年12月22日～平成28年1月20日の期間に有限会社日考研茨城の支援を受けて発掘調査を実施することになった。なお、当該地点は事業範囲が広範であったため、工事実施区画にあわせて次数を分けており、

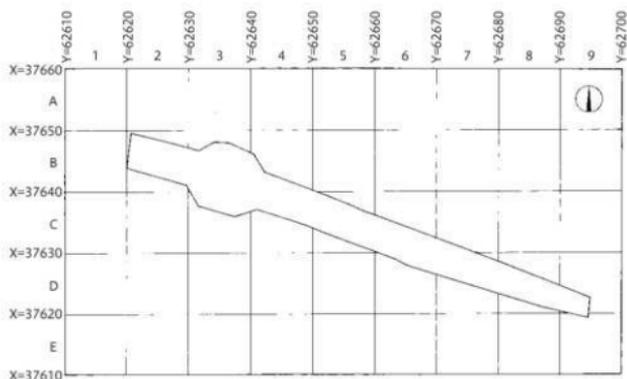
当該地点は第8地点第2次として整理することとした。

(太田)

第2節 発掘作業の経過(第2回)

発掘調査は、試掘調査結果に基づき、開発予定部分にあたる677.0㎡を調査することとなった。なお、発掘は開発における掘削部分のみを対象としたため、検出された遺構は部分調査となったものが多数を占めている。平成27年12月22日から重機による表土除去を開始し、遺構調査を実施した。結果堅穴建物跡7軒、掘立柱建物跡7棟、井戸跡2基、溝跡2条、土坑9基、ピット5基、ピット群1基を検出し、平成28年1月20日に現地調査を終了した。現地調査については以下、調査日誌を記す。

- 12・22 発掘作業を開始する。重機による表土層除去を行う。遺構を検出する為の精査作業を開始する。第1号ピット(Pit1)群を検出する。
- 12・23 重機による表土層除去を行う。
- 12・24 重機による表土層除去作業を継続する。遺構を検出する為の精査作業の継続。第1号ピット(Pit1)群の調査を行う。
- 12・25 重機による表土層除去作業を継続する。遺構を検出する為の精査作業を継続する。第1号井戸跡(SE01)と第1号柱穴状遺構(SP01)を検出する。
- 12・26 遺構を検出する為の精査作業を継続する。第1号掘立柱建物(SB01)と第1～3号土坑(SK01～03)を検出する。第1号井戸跡(SE01)と第1号ピット(SP01)と第1号ピット(Pit1)群の調査を行う。基本層序の調査を行う。
- 12・27 遺構を検出する為の精査作業を継続する。第1～3号堅穴建物跡(SI01～03)と第2・3号掘立柱建物跡(SB02・03)を検出する。第1号掘立柱建物跡(SB01)の調査を行う。
- 1・5 重機による表土層除去作業を行う。遺構を検出する為の精査作業を行う。第4号堅穴建物跡(SI04)を検出する。第1・3号堅穴建物跡(SI01・03)の調査を行う。
- 1・6 重機による表土層除去作業を終了する。遺構を検出する為の精査作業を継続する。第5号堅穴建物跡(SI05)を検出する。調査区清掃後写真撮影を行う(SB01～03, SP01～03)。
- 1・7 遺構を検出する為の精査作業を継続する。第1号溝跡(SD01)を検出する。第5号堅穴建物跡(SI05)の調査を行う。
- 1・8 遺構を検出する為の精査作業を行う。第6号堅穴建物跡(SI06)と第2号柱穴状遺構(SP02)と第4・5号土坑(SK04・05)を検出する。第1～5号堅穴建物跡(SI01～05)と第1号溝跡(SD01)と第1～3号土坑(SK01～03)と第1号柱穴状遺構(SP01)と第1号ピット(Pit1)群の調査を行う。
- 1・9 遺構を検出する為の精査作業を継続する。第2号井戸跡(SE02)と第2号溝跡(SD02)と第6～9号土坑(SK06～09)を検出する。第1・2号堅穴建物跡(SI01・02)のカマドを検出する。第1～3号堅穴建物跡(SI01～03)のベルト除去作業を行う。第6号堅穴建物跡(SI06)と第1号溝跡(SD01)第2号柱穴状遺構(SP02)の調査を行う。
- 1・10 遺構を検出する為の精査作業を継続する。第4・5号掘立柱建物跡(SB04・05)を検出する。第6号堅穴建物跡(SI06)と第2号井戸跡(SE02)と第2号溝跡(SD02)と第6～9号土坑(SK06～09)と第1号ピット群(Pit1)と第1・2号堅穴建物跡(SI01・02)のカマドの調査を行う。
- 1・12 遺構を検出する為の精査作業を継続する。第5号堅穴建物跡(SI05)のカマドを検出する。第1・2・4・5号堅穴建物跡(SI01・02・04・05)と第1・2号井戸跡(SE01・02)と第1号溝跡(SD01)と第1～3・5～



第2図 調査区設定図

7号土坑(SK01～03・05～07)と第1号柱穴状遺構(SP01)と第1・2号竪穴建物跡(SI01・02)のカマドの調査を行う。写真撮影を行う(SI05カマド, SD01・02, SK06・07・09)。

- 1・13 水糸設定作業を行う。第1・2・5号竪穴建物跡(SI01・02・05)と第1号溝跡(SD01)と第1～3号掘立柱建物(SB01～03)と第1～3・9号土坑(SK01～03・09)と第1号ピット群と第5号竪穴建物跡(SI05)のカマドの調査を行う。
- 1・14 第3・5号竪穴建物跡(SI03・05)と第1号井戸跡(SE01)と第1号溝跡(SD01)と第4・5号掘立柱建物(SB04・05)と第4～9号土坑(SK04～09)と第1ピット(SP01)の調査を行う。第1・2号竪穴建物跡(SI01・02)の貼床除去作業を行う。写真撮影を行う(SI01・02・05, SB04, SK04・05・08)。
- 1・15 第1・6・7号土坑(SK01・06・07)の粘土除去作業を行う。第1～6号竪穴建物跡(SI01・03・05・06)の貼床除去作業を行う。第3・4・6号竪穴建物跡(SI03・04・06)と第4・5号掘立柱建物(SB04・05)と第2号溝跡(SD02)と第1・2号柱穴状遺構(SP01・02)と第4～9号土坑(SK04～09)と第1号ピット(Pit1)群の調査を行う。写真撮影を行う(SI01～04・06, SK01・06・07・09)。
- 1・16 第1～6号竪穴建物跡(SI01～06)の貼床除去作業を行う。第2号溝跡(SD02)の調査を行う。写真撮影を行う(SI01～06)。
- 1・20 調査区清掃作業後写真撮影(SI01～06, SD01・02, SP01・02, SK01～03・05・07)。第1号ピット(Pit1)群の調査を行う。調査区全景航空写真撮影を行う。調査区の終了確認を行う。

(大洞)

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

水戸市は、関東平野の北東部、茨城県のほぼ中央に位置する。市域の北部には、西から東へ流れる那珂川とその支流により形成される沖積低地が広がり、これに沿うように東茨城台地が太平洋に向かって突き出している。その下流域右岸の大半が水戸市域となる那珂川は、栃木県的那須連山を水源として、八溝山地の西縁を南へ流れた後、烏山の南から方向を東へ変えて八溝山地を横断し、今度は御前山を背にして南東へ方向を変えて那珂台地と東茨城台地との間を太平洋へと流れ出る。この那珂川が存在により、栃木県域に広がる那須野原や喜連川丘陵などの内陸部と太平洋沿岸部とが水上交通によって結ばれることから、歴史的に水戸市域は交通の要衝地となることが多かった。

東前原遺跡は、東茨城台地の北東部をなす水戸台地の東側縁辺、標高約19mのところに位置しており、東西300m、南北150mほどの畑地に展開する。当該地周辺は明治18(1885)年には広範囲にわたって松林であったことが確認できるが(第2図・第3図)、近年では土地区画整理事業に伴い、大規模な土地改変が行われ、宅地化が進んでいる。

(太田)



第3図 遺跡の位置(○が東前原遺跡、1:25,000 明治18年7月第一軍管地方迅速側図)

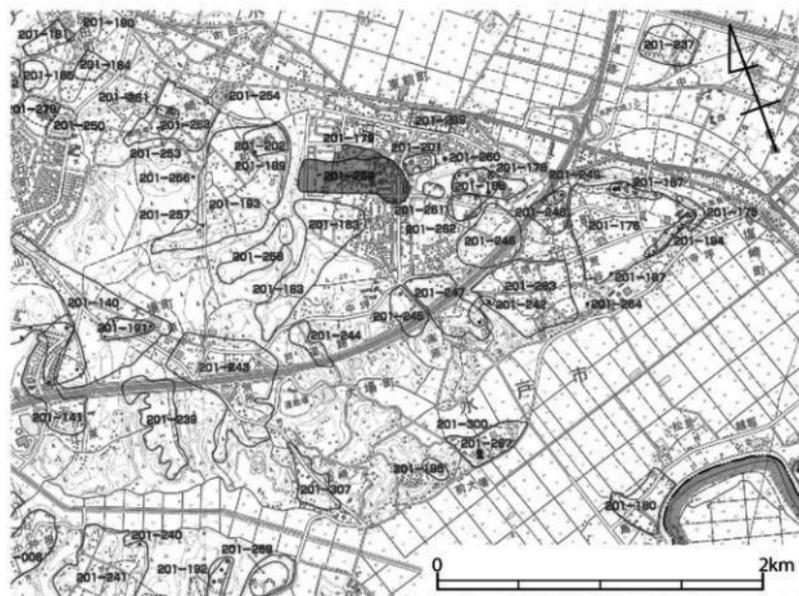
第2節 歴史的環境

東前原遺跡が立地する東茨城台地、特に東端部には、縄文から近世に至るまで、数多くの遺跡が密集している。ここでは東前原遺跡の周辺に分布する遺跡群とそれを取り巻く歴史的環境を概観する。

東前原遺跡周辺における人々の営みの歴史は旧石器時代にまで遡る。当該期の資料は、東前原遺跡と石川川を挟んだ対岸に位置する森戸古墳群からの出土例が知られているのみである。森戸古墳群では、第12号墳(大六天古墳)の発掘調査において、チャートやメノウから構成される石器群の出土が報告されている。それら石器群の大部分は埴丘盛土・周溝覆土内からの出土であるが、剥片であるものの、1点が周溝底面のローム中から出土している(伊東 1976)。これらの資料のほか、明確に遺跡としてくられた範囲内での採集ではないが、水戸市百合が丘、下入野町地内などにおいて、ガラス製黒色デイスaitoや硬質岩製の神子梨型尖頭器が採集されている(川口 2005・2008)。

縄文時代の遺跡としては、第一に挙げるべきは大車貝塚であろう。大車貝塚は『常陸國風土記』那賀部条に記された巨人伝説とともに著名な前期貝塚であり、貝塚としては、文献に記載された世界最古のものである。一部が国指定となっているが、その名に恥じめ豊富な出土資料は、質・量ともに茨城県下における当該期の貝塚を凌駕している(川崎・鈴木・吹野 1986, 井上・金子 1996)。また、下畑遺跡では、加曾利E式、大木8b式期の竪穴建物跡をはじめとする遺構群が確認されており(井上 1985)、複式竪穴を有する住居跡が発見されるなど、中期から後期にかけての人々の営みを窺うことができる。

弥生時代については、東前原遺跡周辺における状況も水戸市全域における傾向に違わず、生活の痕跡は他時期のそれに比べてやや低調な傾向にある。しかしながら、後期に至っては、丘陵沿いの台地上や緑辺部に立地する小原遺跡、高原遺跡、雁沢遺跡などで遺物の採集や出土が報告されており、これらの調査成果の蓄積により、徐々にではあるが、



第4図 周辺の遺跡(1:25,000)

第1表 主要な周辺遺跡一覧

遺跡番号	名称	所在地	種別	遺物	備考
201-006	下畑遺跡	元石川町	集落跡	縄文土器(中・後)、打製石斧、石鏃、磨石、凹石、石棒、石剣、土器片鏃、土師器(古後)	
201-141	雁沢遺跡	元石川町	集落跡	縄文土器(中)、弥生土器(後)、土師器(古前)	
201-175	大串貝塚	塩崎町	貝塚	縄文土器(前・後)、石製品、貝刃、釣針・刺突具	一部国指定
201-176	大串遺跡	塩崎町	集落跡	縄文土器(前・後)、土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)、布目瓦、灰輪陶器	
201-183	小原遺跡	東前町	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)	
201-186	金山塚古墳群	大串町	古墳	円筒埴輪、鉄鏃、刀子	前方後円(1)、 円3(5)
201-187	大串古墳群	大串町	古墳	五枚鏡、銅輪、直刀、鉄鏃、壺蓋、素環鏡板付曹	前方後円1、 円1(5)
201-189	愛宕神社古墳	栗崎町	古墳		
201-192	森戸古墳群	森戸町	古墳	土師器(古)、円筒埴輪、形象埴輪、勾玉	前方後円1、 方0(1)、円15(17)
201-193	上平遺跡	栗崎町	集落跡	土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)	
201-201	柳山館跡	東前町	城館跡		
201-202	和平館跡	栗崎町	城館跡		
201-242	高原古墳群	大場町	古墳		円2
201-244	諏訪前遺跡	大場町	集落跡	土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)	
201-245	沢崎遺跡	大場町	集落跡	土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)、墨書土器、円面鏡、紡錘車、砥石、鉄鏃、鉄鎌	
201-246	梶内遺跡	大串町	集落跡	土師器(古後、奈・平)、須恵器(奈・平)、刀子、円面鏡、墨書土器、陶器、古銭、煙管	
201-247	高原遺跡	大串町	集落跡	弥生土器(後)、土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)、土師質土器、煙管	
201-248	北屋敷遺跡	大串町	集落跡	土師器(古後、奈・平)、須恵器(奈・平)、瓦、陶器	
201-249	北屋敷古墳群	大串町	古墳	形象埴輪、直刀、小刀、鉄鏃	円1(2)
201-251	伊豆屋敷跡	栗崎町	城館跡		
201-252	上野遺跡	栗崎町	集落跡		
201-253	佛性寺古墳	栗崎町	古墳		
201-254	フジヤマ古墳	栗崎町	古墳		
201-256	諏訪神社古墳	栗崎町	古墳		
201-257	千勝神社古墳	栗崎町	古墳		
201-258	打越遺跡	栗崎町	集落跡	土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)	
201-259	東前原遺跡	東前町	集落跡	弥生土器(後)、土師器(古・奈・平)、須恵器(奈・平)	本調査遺跡
201-260	住吉神社古墳	東前町	古墳		
201-261	大串原館跡	大串町	城館跡		
201-263	宮前遺跡	大串町	集落跡	土師器(奈・平)、須恵器(奈・平)	
201-269	上ノ下遺跡	東前町	包蔵地		

水戸市域における弥生時代の土地利用の様相が像を結びつつある。

古墳時代を迎えると、大串古墳群、北屋敷古墳群、高原古墳群、森戸古墳群などを筆頭に、古墳が活発に築造されるようになる。これらの古墳のうち、北屋敷古墳群第2号墳では発掘調査が実施されており、円筒埴輪、武人をはじめとする人物埴輪、馬形埴輪など形象埴輪が多く出土した(井上・千葉 1995)。このうち、ほぼ全身が出土した武人埴輪は水戸市指定文化財となっている。集落の分布としては、中期の集落に係る資料に乏しく、周辺では管見に触れないが、前期の集落としては大串遺跡(井上 1994)、後期の集落としては梶内遺跡(櫻村 1995)、小原遺跡(第3地点)などの調査事例がある。当該台地上においては、前期・後期ともに活発な土地利用がみとれる反面、中期における土地利用が緩慢であると言わざるを得ない。このことは集落展開の動態について、中期において相応の変動があったことを示唆するものである。

奈良・平安時代となり、律令制下の中央政権体制が構築されていくなか、水戸市域においても地方末端支配を目的とした郡衙及び郡守の造営が、渡里町に所在する台渡里官衙遺跡群において行われ、律令体制の中へと組み込まれていくこととなる。水戸市は全城が常陸国那賀郡域内にあり、当該遺跡周辺は同郡芳賀里(郷)に比定される(中山 1979)。当該時期の遺跡として、先ず注目すべきは大串遺跡の存在である。大串遺跡第7地点における発掘調査では、

断面V字状を呈する大型の溝によって区画された内部に、整然と並ぶ総地業の礎石建物跡3棟が確認されている。また、東柱をもち、壺地業を有する桁行6間×梁行3間の大型の掘立柱建物跡なども発見され、一般集落とは大きく異なる様相を示している。大型の掘立柱建物柱抜き取り穴からは多量の炭化材と共に炭化米が、区画溝からは炭化した粟籾や穀籾が出土しており、これらの建物が正倉としての性格を有し、火災により焼失していたことが明らかになっている。また、「厨」銘墨書土器も出土するなど、官衙的色彩の強さが目立つ遺構・遺物群から、本遺跡は那賀郡内に設置された正倉別院であったであろうことが指摘されている(小川・大淵・川口ほか 2008)。

このほか、堀内遺跡は、7世紀から10世紀まで、途中希薄になる時期は存在するものの、比較的長く継続する集落跡として注視すべき遺跡である。当該遺跡では、「舎人」「長」や里(郷)名を記したとみられる「芳」銘墨書土器、9点もの円面硯を出土しており、官衙関連遺跡としての性格を匂わせる(櫻村 1995)。また、東前原遺跡直近に位置する小原遺跡では、近年相次いで実施した発掘調査の結果により、6世紀から9世紀にかけて存続した集落であることが明らかになっており、「官」銘墨書土器の出土から、堀内遺跡と同様の性格を有している可能性が考えられる(太田・土生 2015、齋藤・米川 2016)。以上のような遺跡群の集中する様は、「常陸國風土記」那賀郡条の「平津驛家西一・二里有同名曰大郷」の記事(秋本 1958)とあわせ、東前原遺跡とその周辺地域が、常陸國那賀郡芳里(郷)の中核ともいえる地域であったことを物語っている。

中世、武士が実権を握る時代となり、東前原遺跡が所在する旧常澄村域と重なる恒富郷を根拠としていたのは、常陸平氏大塚氏の一流である石川氏であった(常澄村史編さん委員会編 1989)。東前原遺跡周辺の当該時期の遺跡としては、梅山館跡、和平館跡、大串原館跡が挙げられる。いずれの城館跡も土塁の残存が報告されているが、調査事例が少なく、その詳細については不明な点が多い(水戸市教育委員会 1999)。

近世において、当該地域の台地上は水戸城下の外縁部にあたり、必ずしも前代のような求心力を有する地域であるとは言えない。しかしながら、当該時期に帰属する溝跡や土坑などは各所で散見され、その土地利用の痕跡を窺うことはできる。なかでも、『新編常陸誌』などに立原伊豆守の居所と記されている伊豆屋敷跡では、発掘調査の結果、3条の土塁と1条の溝跡が確認されている(井上 1998)。

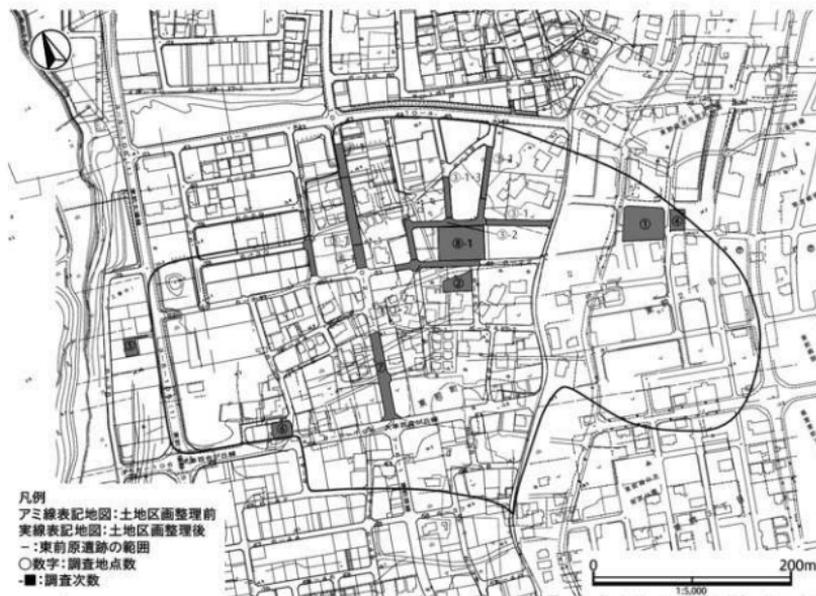
以上のように、東前原遺跡が立地する台地上には、縄文時代から近世に至るまで、豊富な遺跡が存在している。古代には、大串遺跡や堀内遺跡などの官衙関連遺跡が展開をみせ、古代常陸國那賀郡の中核であった台渡里官衙遺跡群との色濃く関連性は疑うべくもない。現在、東前原遺跡周辺における調査の蓄積には目覚ましいものがある。これらの調査成果の母念な検討から、当該地域の歴史像が結ばれていくことが期される。

(米川・太田)

第3節 東前原遺跡における既往の調査

東前原遺跡における調査は、平成20(2008)年の第1地点の試掘調査から始まり、今次調査地点を含めて計8地点・10次の調査を実施している(第4図、第2表)。これらの半分は個人住宅建築に伴う調査面積が狭小な試掘調査であり、東前原遺跡南端部に位置する第6地点にて性格不明遺構が1基確認されたことを除き、明確に埋蔵文化財と捉えられる遺構は検出されていない。しかしながら、表採や調査区表土中では少なからず遺物が散見され、埋蔵文化財が確認できなかった地点周辺に未確認の遺構が存在している可能性が高い。また、近年の土地区画整理事業に伴う市道敷設範囲や整地予定地では、3地点(総調査面積434.5m²)に亘る試掘調査を実施しており、そのほぼ全ての調査区において濃密な埋蔵文化財の分布を確認している。そのうち、第3地点で記録保存を目的とした本発掘調査を実施している。平成26(2014)年度に実施した第3地点第2次調査では、竪穴建物跡11軒(奈良・平安)や掘立柱建物跡2棟(時期不明)、土坑9基(奈良・平安時代、中近世)、溝跡6条(奈良・平安時代)、柱穴状遺構1基(時期不明)を検出しており、出土遺物としては、土師器、須恵器、鉄製品、石製品、獣骨がある。竪穴建物跡は、一辺が6mを超える大型のものから2.5mの小型のものなど大きささまざまな規模の竪穴建物跡がみられ、主軸方向は北北西—南南東を主とするが、東—西に向いたものもわずかに存在することから、異なる時期の集落が展開していたことが予測される。なお、当該地点で確認された竪穴建物跡の多くは北壁にカマドを持つ形状を基本としているが、そのうち1軒のみ、真北側にカマドを持つ竪穴建物跡が確認されていることも注視される。

なお、現在のところ発掘調査には至っていないが、本遺跡の南端に位置する第7地点でも土地区画整理事業に伴う



第5図 東前原遺跡における既往の調査地点(1:5,000)

試掘調査を実施しており、溝跡や土坑、ピットなどが検出されている。当該地点で検出された遺構は、第3地点において検出されている集落の一端を示すものと考えられ、東前原遺跡の南側に近接する小原遺跡との関係も視野に入れつつ、今後実施する発掘調査の成果が期待される地点である。

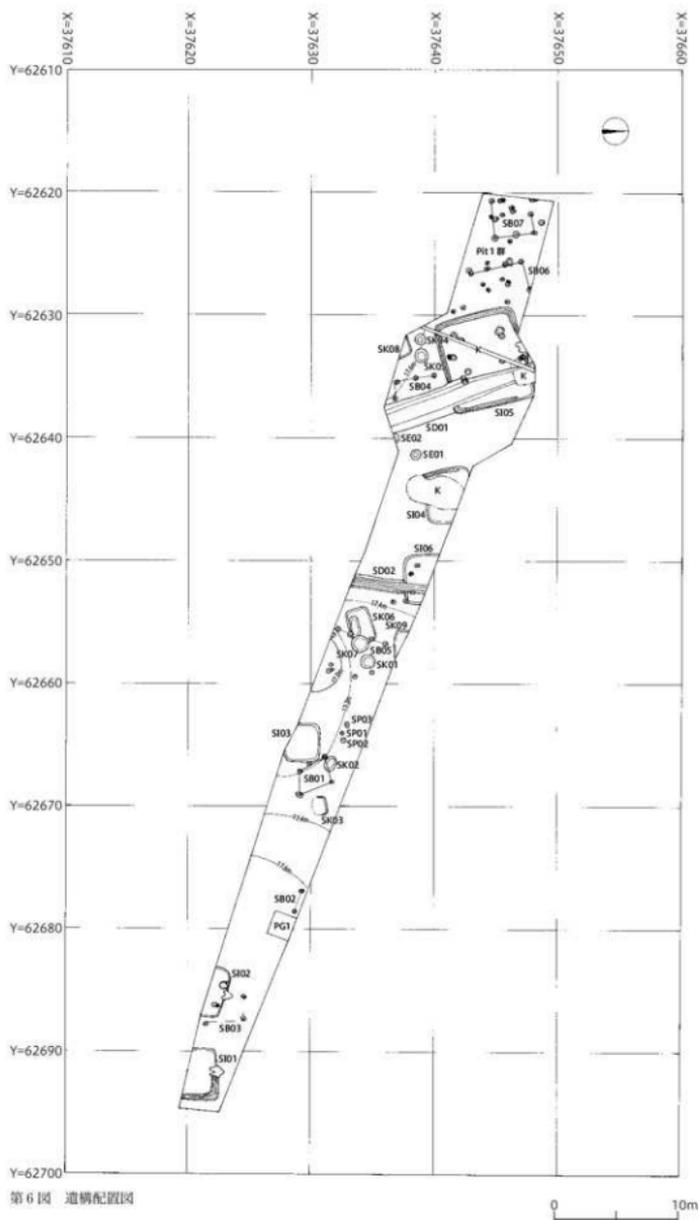
これらの多くの堅穴建物跡の展開から、一時その営みが確認されない時期はあるものの、奈良・平安時代にかけて展開した比較的規模の大きい集落跡であることは確実となってきた。また、中・近世の遺構も点在していることから長年に亘って土地利用がなされてきた遺跡である。

東前原遺跡における主要な発掘調査結果は以上のとおりである。当該遺跡は、地点によっては抜根や切土工事などの過去の大規模な土地改変により既に埋蔵文化財が失われているエリアも存在するが、遺跡の保存状態は比較的良好である。

(太田)

第2表 東前原遺跡における既往の調査一覧

地点名・次数	種別	調査期間	調査箇所	調査原因	遺構
第1地点第1次	試	平成20年11月11日	東前2丁目57・60	個人住宅建築	— ○
第2地点第1次	試	平成24年2月2日	東前町1098	個人住宅建築	— —
第3地点第1次	試	平成26年5月8日～5月6日	東前町1104-1～1118-1	土地区画整理事業	○ ○
第3地点第2次	本	平成27年2月9日～ 平成28年3月10日	東前町1106-1, 1113, 1115-2, 1116-1, 1117, 1118-1	土地区画整理事業	○ ○
第4地点第1次	試	平成26年7月30日	東前2丁目61, 62	個人住宅建築	— ○
第5地点第1次	試	平成27年1月22日	東前第二土地区画整理事業75街区符号15区画	個人住宅建築	— —
第6地点第1次	試	平成27年4月28日	東前町1147	個人住宅建築	○ ○
第7地点第1次	試	平成27年5月8日	東前町1124-1～1126	土地区画整理事業	○ ○
第8地点第1次	試	平成27年6月16日～6月19日	東前町1120～1122-1	土地区画整理事業	○ ○



第6図 遺構配置図

0 10m

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 調査の概要

東前原遺跡は、水戸市の北東部に位置し、那珂川の右岸の標高17.5mの台地上に立地している。調査前の現況は畑地であり、今回677.0㎡を発掘調査した。

調査の結果、当遺跡は、旧石器時代、奈良・平安時代、中・近世までの複合遺跡であることが判明した。確認された遺構は、竪穴建物跡6棟、掘立柱建物跡7棟、井戸跡2基、溝跡2基、土坑9基、ピット5基、ピット群1基が確認された。

また主な遺物として、旧石器時代の石器1点、土師器（坏・高台付坏・甕・甗）、須恵器（坏・高台付坏・盤・短頸瓶・甕・甗）、金属製品（刀子・煙管）、陶磁器（小碗・丸碗・罌鉢・壺）、瓦質土器（香炉・風炉・深鉢）、土師質土器（小皿・内耳鍋）などが出土している。

第2節 基本層序(第7図)

調査区東部に一辺2×2mのテストピットを設定して、表土上層から深さ1.4mの赤城-鹿沼バミス層まで掘り下げ基本層序の観察を行った。土層は8層に分層された。第1層から第2層は耕作土である。3層から自然堆積層でソフトローム層、4層から7層がハードローム層、8層が赤城-鹿沼バミス層(Ag-Kp)である。

第1層は黒褐色(10YR 3/1)を呈する耕作土層である。微量のローム粒子を含む。締りがあり、粘性が強い。層厚は22~28cmである。

第2層はにぶい黄褐色(10YR 4/3)を呈する耕作土層である。少量のローム粒子・ロームブロックを含む。締りがあり、粘性が強い。層厚は5~17cmである。

第3層は黄褐色(2.5Y 5/3)のソフトローム層で、ローム粒子を少量、黒色粒子・赤色粒子を微量に含む。締りにやや欠け、粘性が強い。層厚は3~18cmである。

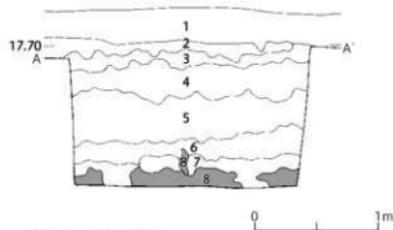
第4層は明黄褐色(10YR 6/6)を呈するハードローム層である。ローム粒子を少量、黒色粒子・赤色粒子を微量に含む。締りがあり、堅緻である。層厚は15~37cmである。

第5層は黄棕色土(10YR 8/8)を呈するハードローム層である。締りがあり、堅緻である。層厚は33~41cmである。

第6層は明黄褐色(10YR 6/8)を呈するハードローム層である。締りががあり、堅緻である。層厚は10~25cmである。

第7層は灰白色(5Y 7/1)を呈する赤城-鹿沼バミス粒子を含むハードローム層である。締りがあり、堅緻である。層厚は10~22cmである。

第8層は黄色(5Y 8/8)を呈する赤城-鹿沼バミス層(Ag-Kp)である。締りがあり、堅緻である。層厚は15cm以上であるが下層が未発掘のため本来の層厚は不明である。



第7図 基本土層図

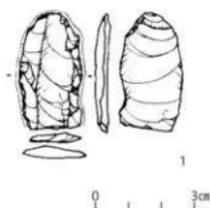
第3節 旧石器時代の遺物(第8図)

調査区中央C-5区で確認された第6号竪穴建物(S106)覆土上層より出土した。石刃素材の使用痕のある剥片である。大きさは長さ3.5cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重さ3.20gを測り、石材は茨城県北部で産出する在地の赤色メノウである。使用による連続的な刃こぼれが下端部を除く周縁部にみられる。

当該資料は旧石器時代の石器ではあるが、出土状態が平安時代の竪穴建物跡覆土中のため帰属時期は不明瞭である。ただし、小型の石刃素材で石材がメノウであることを考え合わせると茨城編年のIIc期に比定される公算が大きい。本遺跡の所在する茨城県北部では、この時期の資料が、これまで日立市泉前遺跡・橋の作遺跡、ひたちなか市武田

石高遺跡・武田西塚遺跡・半分山遺跡・金上塚遺跡から出土している。いずれもナイフ形石器を主体とした石刃石器群であり、仮に当該資料がその一翼を担う、ということであるならば市内初の発見となる。

(橋本)



第8図 旧石器時代の石器

第4節 竪穴建物跡

(1) 第1号竪穴建物跡(SI01) (第9～11図)

位置 調査区東端D-8・9、E-9区、標高17.6mほどの台地上に位置している。南部が調査区域外である。

規模・構造 規模は東西軸4.13m、確認できる南北軸3.25mである。平面形は方形と推定され、主軸方位はN-7°-Wを指す。壁面は外傾して立ちあがり、高さは53.5～60cmを測る。北東方向への拡張建物と推定される。床面はほぼ平坦で貼床されており、壁際を除き硬化面は建物跡のほぼ中央で確認された。また東壁下には、幅20～30cm、深さ1.0～8.5cmの壁溝が検出されているが、更に北壁東側にも幅15～18cm、深さ7.5cmの壁溝が確認された。この部分は貼床され埋め戻されていることから古期と判断し、北東方向へ35.0cm拡張されたものと判断した。柱穴は確認できなかった。覆土は6層に分層できる。全体にレンズ状堆積を示していることから自然堆積であろう。

カマドは、北壁のほぼ中央に付設されている。焚口から煙道部まで138cm、両袖間は最大幅123cmを測り、燃焼部は69×70cmの積円形で、床面からの深さ13cmである。火床面は火熱により赤変硬化しており、袖部は砂質粘土ブロックを主体に積み上げられている。煙道部は壁外へ65.0cm掘り込み、火床部から外傾している。カマド内覆土は2層に分層できる。

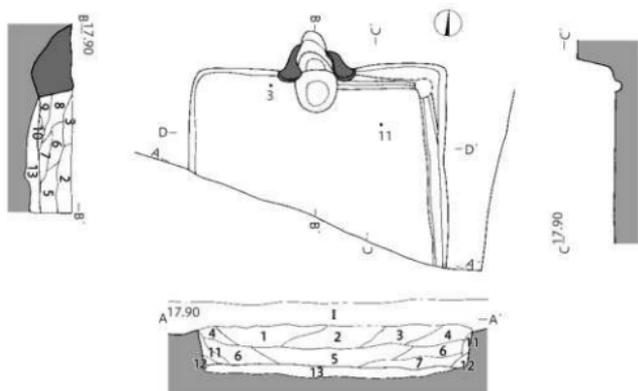
覆土は13層に分層でき、ローム粒子やロームブロックを少量含み、いわゆるレンズ状堆積を呈する自然堆積土であろう。13層は掘方で埋土はローム粒・ロームブロックを混入した褐色土を5～24mの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。

出土遺物は、土師器片38点(甕38)、須恵器片16点(坏10・甕2・盤1・高台付坏2)、金属製品1点(刀子)がカマド周辺を中心に覆土中層から下層にかけて、散在した状態で出土している。3はカマド袖部西側の覆土中、11は北東部の覆土中層から出土している。また、3、4の須恵器坏は、底部が回転ヘラ切りの後、手持ヘラズリを施している。木葉下窓跡群産である。刀子は、刃部・茎部ともに折損している。関は錆化が著しく、不明であるが刃と背に付けられているものと考えられる。

所見 時期は、出土遺物から8世紀第3～第4四半期と考えられる。

第3表 SI01出土土器観察表

神岡 番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第11図	1	土師器	甕	24.0	04.8	-	外面ヨコナデヘラ削り。 内面ヨコナデヘラナデ。内面スス付着。	にぶい 褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/10残存	
第11図	2	土師器	甕	-	07.7	06.0	外面ヘラナデヘラ削り。 内面ヘラナデ。底部木葉煎。	灰黄色色	雲母・石英・長石	底部1/3残存	
第11図	3	須恵器	坏	14.1	4.9	8.6	ロクロ成形。底部回転ヘラ削りの後、 手持ヘラ削り。	灰色	針状鉱物・石英・長石	体部一部欠損	木葉下窓跡群産
第11図	4	須恵器	坏	15.0	4.9	8.8	ロクロ成形。底部回転ヘラ削りの後、 手持ヘラ削り。	灰色	針状鉱物・石英・長石	体部1/3残存	木葉下窓跡群産
第11図	5	須恵器	坏	14.0	5.3	09.0	ロクロ成形。外面スス付着。	灰白色	針状鉱物・石英・長石	体部1/5残存	
第11図	6	須恵器	坏	13.0	6.6	-	ロクロ成形。	灰白色	針状鉱物・石英・長石	口縁部1/6残存	
第11図	7	須恵器	坏	-	6.4	7.8	ロクロ成形。底部回転ヘラ削り。	灰色	針状鉱物・石英・長石	底部1/2残存	
第11図	8	須恵器	坏	-	6.2	7.5	ロクロ成形。底部回転ヘラ削り。	灰色	針状鉱物・石英・長石	底部1/2残存	
第11図	9	須恵器	高台付	14.0	6.6	09.0	ロクロ成形。底部回転ヘラ削り。 高台貼付。外面自然釉。	灰色	針状鉱物・石英・長石 ・黒色粒子	体部1/3残存	
第11図	10	須恵器	甕	-	6.4	10.8	ロクロ成形。底部回転ヘラ削り。 高台貼付。	灰色	針状鉱物・石英・長石	底部1/3残存	



1. 黄褐色土(10YR4/7)を呈する。砂性土。

第1層は黄褐色土(10YR3/1)を呈する。多数のローム粒子を含む。しまりが有り、粘性が強い。

第2層は黄褐色土(10YR3/1)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりが有り、粘性が強い。

第3層は黄褐色土(10YR3/1)を呈する。少量のローム粒子。少量のロームブロックを含む。しまりが有り、粘性が強い。

第4層は黄褐色土(10YR3/2)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりが有り、粘性が強い。

第5層は黄褐色土(10YR3/1)を呈する。少量のローム粒子・多数のロームブロックを含む。しまりが有り、粘性が強い。

第6層は黄褐色土(10YR4/4)を呈する。多数のローム粒子を含む。しまりが有り、粘性が強い。

第7層は黄褐色土(10YR2/2)を呈する。多数のローム粒子を含む。しまりが有り、粘性が強い。

第8層は黄褐色土(10YR5/1)を呈する。少量のローム粒子。少量の粘土粒子を含む。しまりが有り、粘性が強い。

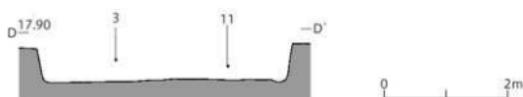
第9層は黄褐色土(10YR3/4)を呈する。少量のローム粒子。少量の粘土粒子を含む。しまりが有り、粘性が強い。

第10層は黄褐色土(10YR3/3)を呈する。少量のローム粒子。少量の粘土粒子を含む。しまりが有り、粘性が強い。

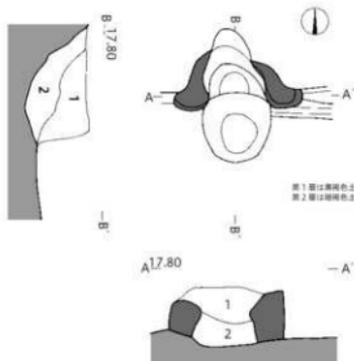
第11層は黄褐色土(10YR4/6)を呈する。多数のローム粒子を含む。しまりが有り、粘性が強い。

第12層は黄褐色土(10YR3/4)を呈する。多数のローム粒子を含む。しまりが有り、粘性が強い。

第13層は黄褐色土(10YR4/6)を呈する。多数のローム粒子。多数のロームブロックを含む。しまりが有り、粘性が強い。



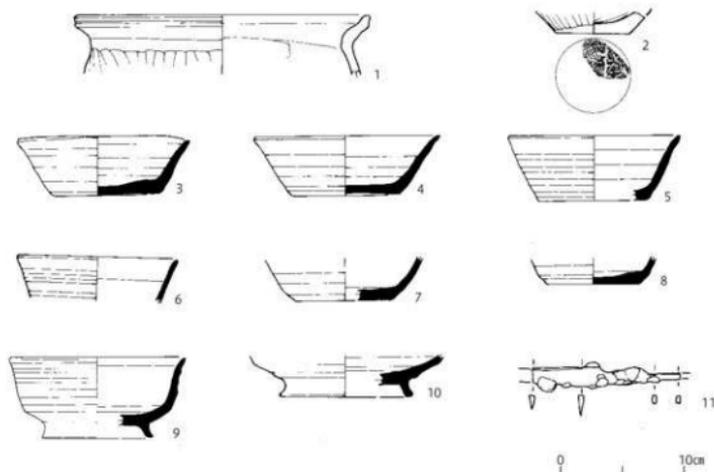
第9図 第1号竪穴建物跡S101実測図



第1層は黄褐色土(10YR3/2)を呈する。少量のローム粒子・粘土粒子を含む。しまりが有り、粘性が強い。

第2層は黄褐色土(10YR3/4)を呈する。少量のローム粒子・粘土粒子を含む。しまりが有り、粘性が強い。

第10図 第1号竪穴建物跡S101カマド実測図



第11図 第1号竪穴建物跡SI01出土遺物

神岡 番号	種類	計測値(cm) (g)				特 徴	材質	残存部位	備考
		長さ	幅	厚さ	重量				
第11図	刀子	10.9	1.25- 1.48	0.45	10.9	刃部断面三角形	灰	刃先・茎一部欠損	

(2) 第2号竪穴建物跡(SI02) (第12～14図)

位置 調査区東部D-8区、標高17.6mほどの台地上に位置している。南部が調査区域外である。

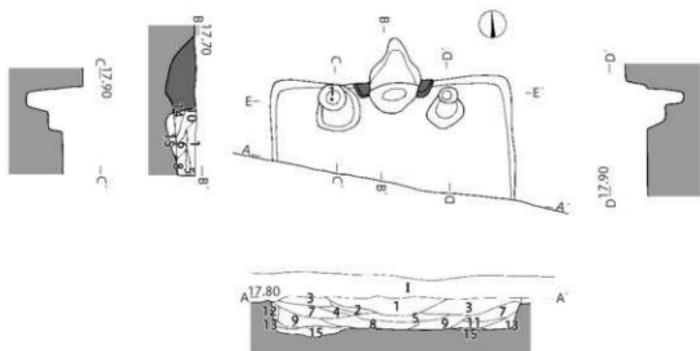
規模・構造 規模は東西軸3.9m、確認できる南北軸1.98mである。平面形は方形と推定され、主軸方位はほぼ真北のN-0°を指す。壁面は外傾して立ち上がり、高さは25.5～36.5cmを測る。

床面はほぼ平坦で貼床されており、壁際を除き硬化面は建物跡のほぼ中央で確認された。柱穴はカマド両脇で北壁際に新旧2基1組の柱穴が確認された。北西部P1は規模の大きい古期が径73×67cm、深さ19.7cmの隅丸方形、新期の北柱穴が径41×41cm、深さ55.2cmの円形。北東部P2は規模の大きい古期が径54×50cm、深さ27.5cmの略円形、新期の北柱穴が径29×26.5cm、深さ56.5cmの円形を呈する。壁溝は確認できなかった。

カマドは、北壁のほぼ中央に付設されている。焚口から煙道部まで125cm、両袖間は最大幅123cmを測り、燃焼部は49×82cmの楕円形で、床面からの深さ13cmである。火床面は火熱により赤変硬化しており、袖部は砂質粘土ブロックを主体に積み上げられている。煙道部は壁外へ77.0cm掘り込み火床部から外傾している。カマド内覆土は2層に分層できる。

覆土は15層に分層でき、ローム粒子やロームブロックを少量含み、いわゆるレンズ状堆積を呈する自然堆積土であろう。14層は掘形で埋土はローム粒・ロームブロックを混入した褐色土を3～19cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。

出土遺物は、土師器片43点(坏9・甕34)、須恵器片14点(坏10・甕1・有台坏2・蓋1)が、カマド周辺を中心に散

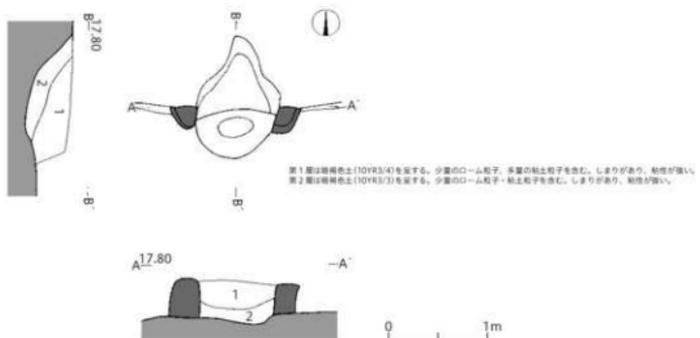


I: 縄文土(10YR4/7)を呈する。薪土
 第1層は黒褐色土(10YR3/1)を呈する。多数のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第2層は黒褐色土(10YR3/3)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第3層は黒褐色土(10YR3/2)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第4層は黒褐色土(10YR3/4)を呈する。多数のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第5層は黒褐色土(10YR3/4)を呈する。少量のローム粒子・少量のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第6層は黒褐色土(10YR3/4)を呈する。少量のローム粒子。少量のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第7層は黒褐色土(10YR3/4)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が高い。

第8層は(10YR3/4)を呈する。多数のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第9層は(10YR3/4)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第10層は(10YR4/3)を呈する。少量のローム粒子。多数のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第11層は黒褐色土(10YR3/1)を呈する。多数のローム粒子。多数のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第12層は黒褐色土(10YR4/4)を呈する。多数のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第13層は黒褐色土(10YR3/1)を呈する。少量のローム粒子。少量のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第14層は黒褐色土(10YR4/4)を呈する。多数のローム粒子・ロームブロック。少量の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第15層は褐色土(10YR4/6)を呈する。多数のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が高い。

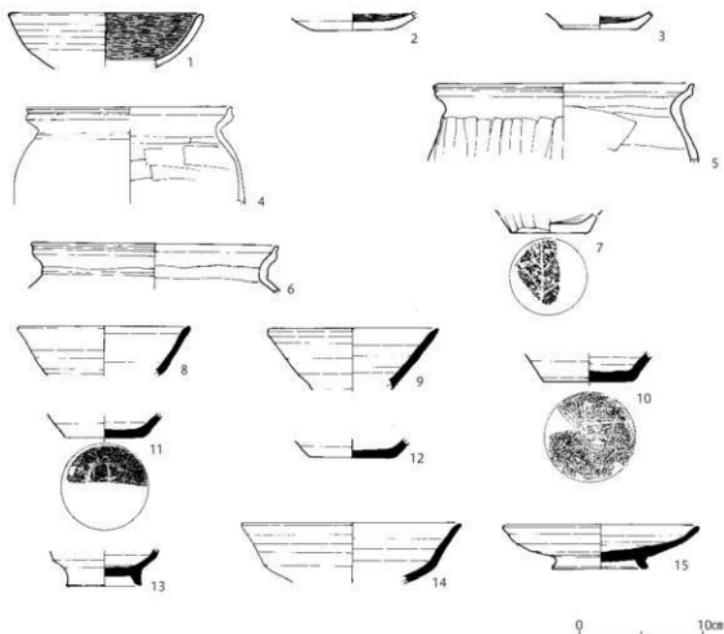


第12図 第2号竪穴建物跡実測図



第1層は黒褐色土(10YR3/4)を呈する。少量のローム粒子。多数の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が高い。
 第2層は褐色土(10YR3/7)を呈する。少量のローム粒子・粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が高い。

第13図 第2号竪穴建物跡カマド実測図



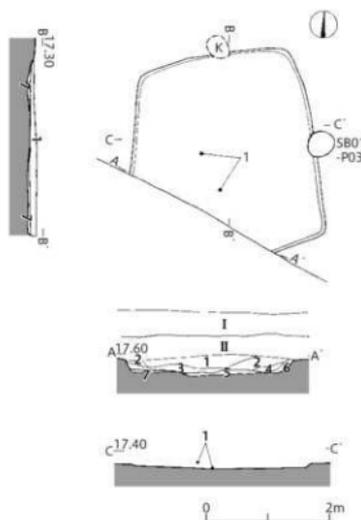
第14図 第2号竪穴建物跡S102出土遺物

在した状態で出土している。10, 11の須恵器坯底部には、へら記号が付されている。13, 14は須恵器有台坪, 15は須恵器の有台盤である。木葉下窯跡群産である。

所見 時期は出土遺物から、9世紀第2四半期と考えられる。

第4表 S102出土土器類表

神岡 番号	番号	種別	器種	計測値(cm)		器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高					
第14区	1	土器器	坏	16.0	(4.5)	-	褐色	針状鉱物・石英・長石	口縁部1/6残存	
第14区	2	土器器	坏	-	(1.4)	16.0	褐色	針状鉱物・雲母・石英・長石	底部1/4残存	
第14区	3	土器器	坏	-	(1.4)	16.0	淡褐色	黒色粒子・石英・長石	底部1/4残存	
第14区	4	土器器	甕	16.6	(7.9)	-	赤褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/2残存	
第14区	5	土器器	甕	21.0	(5.3)	-	褐色	雲母・石英・長石・黒色粒子	口縁部1/5残存	
第14区	6	土器器	甕	20.0	(4.0)	-	褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/7残存	
第14区	7	土器器	甕	-	(1.5)	16.0	にぶい褐色	雲母・石英・長石	底部1/3残存	



第15図 第3号竪穴建物跡SI03実測図

- 1 高灰白色土(10YR4/2)を呈する。粘土。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2)を呈する。黄褐色のローム粒子を含む。
- 3 第1層は黄褐色土(10YR4/1)を呈する。黄褐色のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
- 4 第2層は黄褐色土(10YR4/1)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
- 5 第3層は黄褐色土(10YR4/1)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
- 6 第4層は黄褐色土(10YR4/1)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
- 7 第5層は黄褐色土(10YR4/1)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
- 8 第6層は黄褐色土(10YR4/4)を呈する。多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
- 9 第7層は黄褐色土(10YR4/6)を呈する。多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。



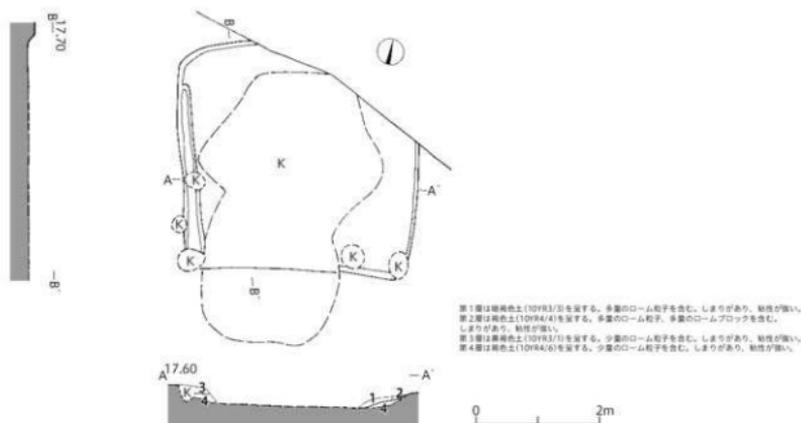
第16図 第3号竪穴建物跡SI03出土遺物

種別 番号	番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第14図	8	須恵器	杯	114.0	(4.1)	-	ロクロ成形、外面ス付着。	灰白色	針状鉱物・石英・長石	体部1/6残存	9世紀第2、木炭下遺跡群産
第14図	9	須恵器	杯	114.0	(5.1)	-	ロクロ成形。	灰白色	チャート・石英・長石	体部1/6残存	9世紀第2、木炭下遺跡群産
第14図	10	須恵器	杯	-	(2.3)	7.1	底部回転へう切り。へう記号。	灰白色	針状鉱物・石英・長石	底部1/2残存	9世紀第2、木炭下遺跡群産
第14図	11	須恵器	杯	-	(1.8)	6.5	ロクロ成形、底部回転へう割り。へう記号。	灰白色	針状鉱物・石英・長石	底部1/2残存	9世紀第2、木炭下遺跡群産
第14図	12	須恵器	杯	-	(7.0)	(1.5)	ロクロ成形、底部回転へう切り。	灰色	針状鉱物・石英・長石	底部1/2残存	9世紀第2、木炭下遺跡群産
第14図	13	須恵器	有台盤	118.0	(5.0)	-	ロクロ成形、外面下回転へう割り。	灰色	チャート・針状鉱物・石英・長石	口縁部1/4残存	9世紀第2、木炭下遺跡群産
第14図	14	須恵器	有台杯	-	(3.0)	6.0	底部回転へう切りの後、回転へう割り。高台胎付。	灰褐色	針状鉱物・石英・長石	高台1/2残存	9世紀第2、木炭下遺跡群産
第14図	15	須恵器	有台杯	15.8	3.6	7.8	ロクロ成形、底部回転へう切りの後、手持ちへう割り。高台胎付。	灰色	針状鉱物・石英・長石・黒色粒子	体部1/2残存	9世紀第2、木炭下遺跡群産

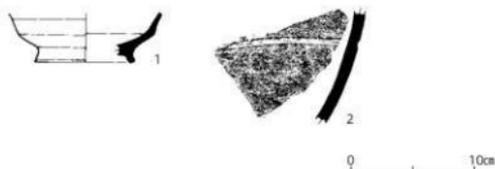
(3) 第3号竪穴建物跡(SI03) (第15・16図)

位置 調査区中央部C-6、D-6区、標高17.2mほどの台地上に位置している。南西隅部が調査区域外である。

規模・構造 規模は東西軸2.90m、南北軸3.27mで、平面形は南北にやや長い長方形と推定され、主軸方位はN-16°-Wを指す。壁面は外傾して立ちあがり、高さは2.5~9cmを測る。床面はほぼ平坦で貼床されており、壁際を除き硬化面は建物跡のほぼ中央で確認された。柱穴および壁溝は検出できなかった。



第17図 第4号竪穴建物跡SI04実測図



第18図 第4号竪穴建物跡SI04出土遺物

覆土は7層に分層でき、ローム粒子やロームブロックを少量含み、いわゆるレンズ状堆積を呈する自然堆積土であろう。7層は掘形で埋土はローム粒・ロームブロックを混入した褐色土を2～5cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。

出土遺物は、土師器片11点(甕1)、須恵器片2点(坏2)が味面上より出土している。1は須恵器坏で底部は回転ヘラ切り後、ヘラナデが施され、ヘラ記号が付されている。木葉下窓跡群産である。

所見 時期は、出土遺物から9世紀第3四半期と考えられる。

第5表 SI03出土土器観察表

神岡 番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第16図	1	須恵器	坏	14.8	5.4	7.3	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り後ヘラナデ。ヘラ記号。	灰オリーブ色	石英・長石・黒色粒子	体部1/3欠損	9世紀第3四半期、木葉下窓跡群産

(4) 第4号竪穴建物跡(SI04) (第17・18図)

位置 調査区中央部B-4, C-4区, 標高17.4mほどの台地上に位置している。北東隅部が調査区域外へ延び、竪穴建物跡の中央部が大きな攪乱を受けている。

規模・構造 確認できる規模は東西軸3.8m, 南北軸3.67mで、平面形は方形と推定され、主軸方位はN-18°-Wを指す。壁面は外傾して立ちあがり、高さは20~31cmを測る。壁溝は北壁辺西側を除き周回しており、規模は幅20~31cm, 深さ3.0~6.5cmで断面U字状を呈する。柱穴は確認できなかった。柱穴および壁溝は確認できなかった。確認できる床面はほぼ平坦で貼床されているものの、明瞭な硬化面は確認できなかった。

覆土は4層に分層でき、ローム粒子やロームブロックを少量含み、いわゆるレンズ状堆積を呈する自然堆積土であろう。4層は掘形で埋土はローム粒・ロームブロックを混入した褐色土を5~14cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。

出土遺物は、土師器片7点(甕7), 須恵器片4点(坏1・甕1・高台付坏1・甕1)が床面上より出土している。1, 2とも木炭下窯跡群産である。

所見 時期は、出土遺物から9世紀前半と考えられる。

第6表 SI04出土土器観察表

検出番号	番号	種類	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第18図	1	須恵器	有台坏	-	43.0	18.0	ロクロ成形, 高台貼付け。	灰色	針状鉄屑・石英・長石	底部1/4残存	9世紀前半, 木炭下窯跡群産
第18図	2	須恵器	甕	-	-	-	外面凹縁, ヘラナデ, 内面ヘラナデ。	灰色	石英・長石	胴部破片	9世紀前半, 木炭下窯跡群産

(5) 第5号竪穴建物跡(SI05) (第19~21図)

位置 調査区西部B-2・3区, 標高17.6mほどの台地上に位置している。北部が調査区域外へ延び、竪穴建物跡の東部が第1号溝跡(SD01)に寄って掘り込まれ、ほぼ中央斜めに幅20cm前後、水道管工事により攪乱を受けている。

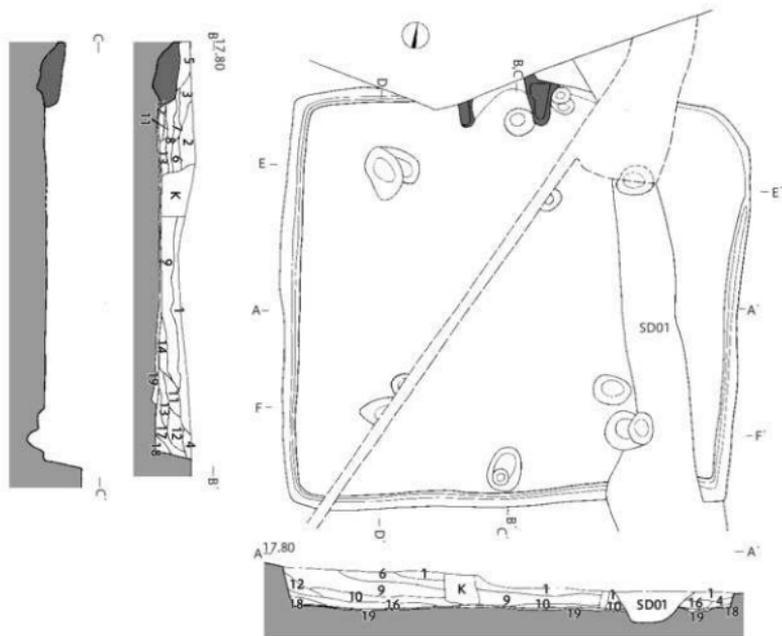
規模・構造 規模は東西軸7.31m, 南北軸6.83mで、平面形は方形と推定され、主軸方位はN-13°-Wを指す。壁面は外傾して立ちあがり、高さは、27.5~63.5cmを測る。壁溝は北東コーナーを除き周回しており、規模は幅18~33cm, 深さ0.5~4.5cmで断面U字状を呈する。柱穴は7基検出され、北西部P1は径90×52cm, 深さ48.3cmの楕円形を呈し東側に柱抜き取り痕が確認された。北東部P2は径46×(20)cm, 深さ39cmの楕円形。南東部P3は径64×(37)cm, 深さ50.5cmの円形を呈し、東側に52×41cm, 深さ37cmの柱抜き取り穴痕が確認された。南西部P4は約半分が攪乱を受けており径42×(35)cm, 深さ66cmの楕円形を呈し北東部に径35×18cm, 深さ44cmの柱抜き取り痕が確認された。南壁際中央のP5は梯子穴である。規模は径72×52cm, 深さ10cmの楕円形で、南端に径28×27cm, 深さ26.0cmの円形ピットを伴う。カマド前面P6は径42×21cm, 深さ29cmの円形ピット, 南東部P3脇のP7は径62×40cm, 深さ62cmの楕円形ピットが確認されたものの性格は不明である。床面は全面貼り床され、ほぼ平坦で硬化面は建物跡中央部で確認された。

カマドは北壁のほぼ中央に付設されており、煙道部は調査区域外に延びている。確認できる規模は、焚口から煙道部まで88cm, 両袖間は最大幅158cmを測り、燃焼部は48×46cmの円形で、床面からの深さ11cmである。火床面は火熱により赤変硬化しており、袖部は砂質粘土ブロックを主体に積み上げられている。カマド内覆土は3層に分層できる。

覆土は19層に分層でき、でローム粒子やロームブロックを少量含み、いわゆるレンズ状堆積を呈する自然堆積土である。19層は掘形で埋土はローム粒・ロームブロックを混入した褐色土で1~10cmの厚さに敷きつめ、貼床にしていた。

出土遺物は、土師器片127点(坏15・甕112), 須恵器片26点(坏6・甕11・盤1・甕1・蓋6・短頸瓶1)がカマド周辺を中心に散布した状態で出土している。5の須恵器坏の底部は回転ヘラケズリで、66の須恵器盤底部は回転ヘラケズリである。7~9の須恵器蓋は天井部が回転ヘラケズリである。いずれも木炭下窯跡群産である。10は短頸瓶の胴部片で産地は不明である。また17の須恵器甕は新治窯跡群産である。

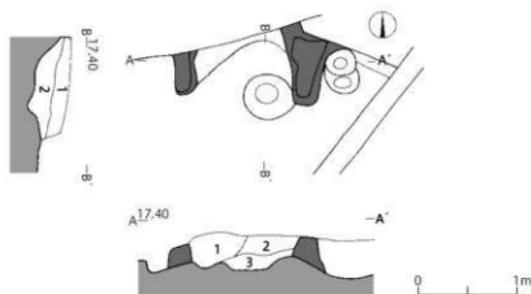
所見 時期は、出土遺物から8世紀中葉と考えられる。



第1層は黒褐色土(10V93/2)を呈する。少量のローム粒子、少量の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が弱い。
 第2層は黒褐色土(10V93/2)を呈する。少量のローム粒子、少量の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第3層は濃い黄褐色土(10V94/2)を呈する。少量のローム粒子、少量の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第4層は黒褐色土(10V92/3)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第5層は濃い黄褐色土(10V96/3)を呈する。少量のローム粒子、多数の粘土粒子を散在的に含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第6層は黒褐色土(10V93/2)を呈する。少量のローム粒子、少量の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第7層は濃い黄褐色土(10V95/4)を呈する。少量のローム粒子、多数の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第8層は濃い黄褐色土(10V96/4)を呈する。少量のローム粒子、多数の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第9層は黒褐色土(10V93/2)を呈する。少量のローム粒子、少量の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第10層は黒褐色土(10V93/2)を呈する。少量のローム粒子、少量の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第11層は黒褐色土(10V92/3)を呈する。少量のローム粒子、少量のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が強い。

第12層は黒褐色土(10V93/3)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第13層は黒褐色土(10V93/4)を呈する。少量のローム粒子、多数のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第14層は濃い黄褐色土(10V95/4)を呈する。少量のローム粒子、少量の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第15層は濃い黄褐色土(10V95/4)を呈する。少量のローム粒子、多数の粘土粒子、多数の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第16層は濃い黄褐色土(10V93/4)を呈する。少量のローム粒子、少量の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第17層は黒褐色土(10V93/1)を呈する。少量のローム粒子、多数の粘土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第18層は黒褐色土(10V93/1)を呈する。少量のローム粒子、少量のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第19層は黒褐色土(10V96/6)を呈する。多数のローム粒子、多数のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が強い。

第19図 第5号竪穴建物跡S105実測図



第20図 第5号竪穴建物跡SI05カマド実測図

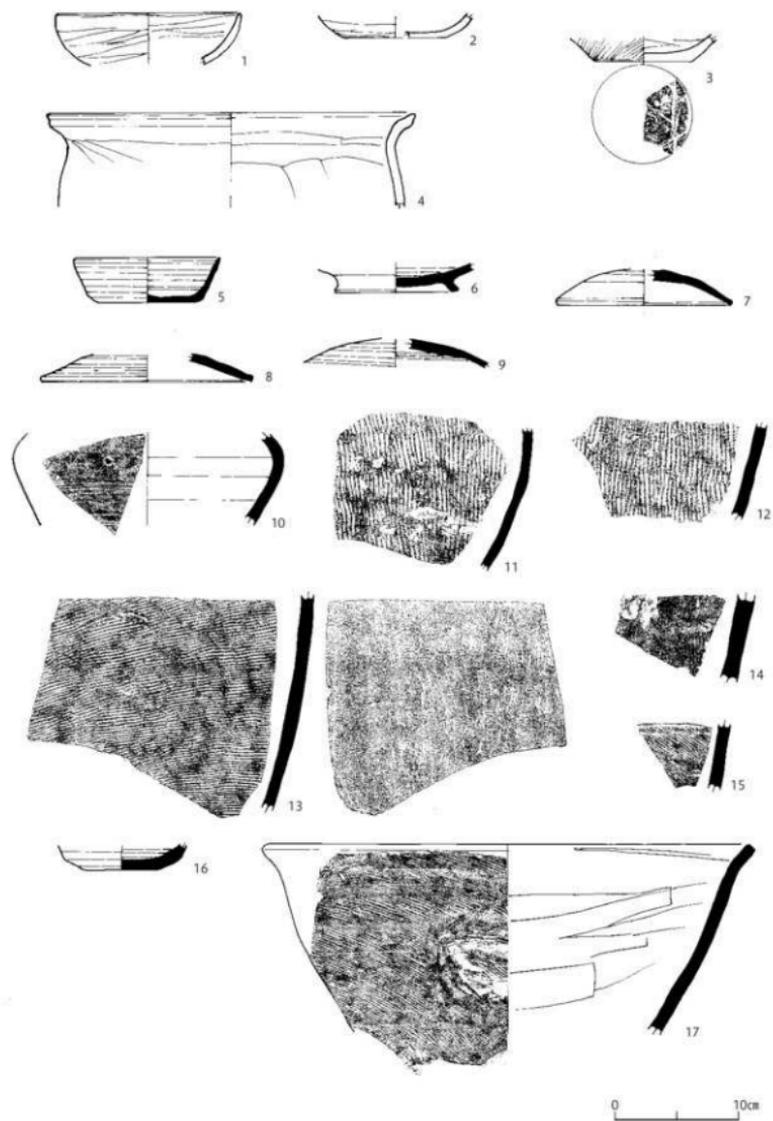
第7表 SI05出土土器観察表

種類 番号	番号	種別	器種	計測値(m)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第21図	1	土師器	埴	115.0	(4.2)	-	外面ヨコナデ、ヘラ削り、内面ヘラナデ、黒色処理	にぶい赤褐色	石英・長石・黒色粒子	口縁部1/4残存	
第21図	2	土師器	埴	-	(2.0)	8.0	外面ヘラ削り、内面ヘラナデ、底部手持ちヘラ削り	浅褐色	針状鉱物・石英・長石	底部1/3残存	
第21図	3	土師器	甕	13.0	(7.7)	-	外面ヨコナデ、ヘラナデ、内面ヨコナデ、ヘラナデ	にぶい褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/8残存	
第21図	4	土師器	甕	-	(2.2)	18.0	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ、底部木炭痕	にぶい褐色	雲母・石英・長石	底部1/4残存	
第21図	5	須恵器	埴	6.0	3.6	8.0	ロクロ成形、底部回転ヘラ削り	灰色	針状鉱物・石英・長石・黒色粒子	体部1/2残存	木葉下遺跡群産
第21図	6	須恵器	甕	-	(2.3)	110.0	ロクロ成形、底部回転ヘラ削り、高台粘付け	灰白色	針状鉱物・石英・長石	底部1/4残存	木葉下遺跡群産
第21図	7	須恵器	甕	14.0	(3.0)	-	ロクロ成形、天井部回転ヘラ削り	灰白色	針状鉱物・石英・長石	体部1/4残存	木葉下遺跡群産
第21図	8	須恵器	蓋	117.0	(2.1)	-	外面ロクロ成形、天井部回転ヘラ削り	灰白色	針状鉱物・石英・長石	口縁部1/8残存	8世紀中葉、木葉下遺跡群産
第21図	9	須恵器	蓋	-	(1.9)	-	外面天井部回転ヘラ削り	灰色	針状鉱物・石英・長石	体部1/5残存	8世紀中葉、木葉下遺跡群産
第21図	10	須恵器	短頸瓶	-	(7.5)	-	ロクロ成形、外面ヘラ削り	灰色	石英・長石	胴部破片	
第21図	11	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面オサエ	灰色	黒色粒子・石英・長石	胴部破片	
第21図	12	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ	褐色	石英・長石	胴部破片	
第21図	13	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面オサエ	灰白色	石英・長石	胴部破片	
第21図	14	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面オサエ	灰色	黒色粒子・石英・長石	胴部破片	
第21図	15	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ	黒褐色	雲母・石英・長石	胴部破片	
第21図	16	須恵器	甕	-	(2.1)	16.0	ロクロ成形、底部回転ヘラ削り	灰白色	石英・長石	底部1/4残存	
第21図	17	須恵器	甕	139.0	(15.5)	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ、把手粘付け	灰色	雲母・石英・長石	体部1/8残存	新治遺跡群産

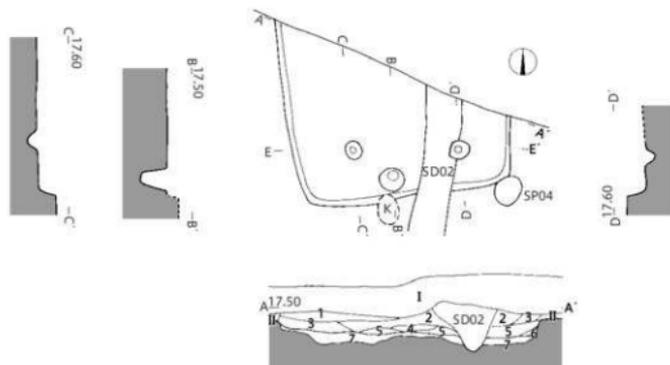
(6) 第6号竪穴建物跡(SI06) (第22・23図)

位置 調査区中央部B-4、C-4・5区、標高17.4mほどの台地上に位置している。北部が調査区域外へ延び、建物跡の東部に第2号溝跡(SD02)に寄って掘り込まれている。

規模・構造 確認できる規模は東西軸3.51m、南北軸2.94mで、平面形は方形と推定され、主軸方位はN-11°-W



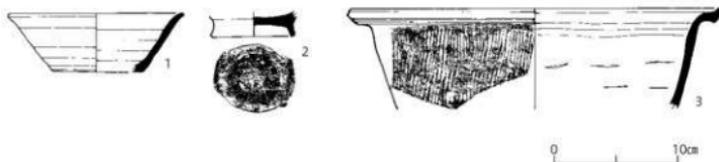
第21图 第5号竪穴建物跡S105出土遺物



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2)を呈する。耕作土。
- 2 黄褐色(10YR3/1)を呈する。微量のローム粒子を含む。
- 3 黄褐色土(10YR3/2)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあがり、粘性が強い。
- 4 黄褐色土(10YR3/2)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあがり、粘性が強い。
- 5 黄褐色土(10YR3/1)を呈する。微量のローム粒子を含む。しまりがあがり、粘性が強い。
- 6 黄褐色土(10YR3/2)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあがり、粘性が強い。
- 7 黄褐色土(10YR4/6)を呈する。多量のローム粒子、多量のロームブロックを含む。しまりがあがり、粘性が強い。



第22図 第6号竪穴建物跡実測図



第23図 第6号竪穴建物跡出土遺物

指す。壁面は外傾して立ちあがり、高さ12~27cmを測る。柱穴は3本検出され、南東部P1は径30×29cm、深さ15の円形。南西部P2は径32×27cm、深さ14.1cmの楕円形を呈する。南壁際に位置するP3は梯子穴と推定され径40×36cm、深さ42cmの楕円形を呈する。壁溝は構築されていない。またカマドは、調査区域外のため不明である。床面は貼り床され、ほぼ平坦で硬化面は建物跡でほぼ中央で確認された。

覆土は7層に分層でき、ローム粒子やロームブロックを少量含み、いわゆるレンズ状堆積を呈する自然堆積土であ

ろう。7層は掘形で埋土はローム粒・ロームブロックを混入した褐色土を5～19mの厚さに敷きつめ、貼床にしている。

出土遺物は、土師器片2点(甕2)、須恵器8点(坏1・甕4・有台坏1・甕1)が床面上に散在した状態で出土している。1の底部は手持ちへうケズリで、木葉下窯跡群産である。2の有台坏の底部破片は転用甕の可能性がある。やはり木葉下窯跡群産。3は甕もしくは鉢と推定される。外面は縦位の平行タタキで、新治窯跡群産である。

所見 時期は、出土遺物が9世紀前半から第3四半期と幅があるものの、9世紀中葉と考えられる。

第8表 5106出土土器観察表

神田番号	番号	種類	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第2区	1	須恵器	坏	114.2	4.8	17.0	ロクロ成形。底部手持ちへうケリ。	にぶい 褐色	針状鉱物・黒色粒子・ 石英・長石	体部1/5残存	9世紀前半平土。 木葉下窯跡群産
第2区	2	須恵器	有台坏	-	62.0	6.8	ロクロ成形。底部手持ちへうケリ。へうケズリ。高台貼付け。	黒褐色	針状鉱物・石英・長石	底部残存	9世紀前半平土。 木葉下窯跡群産
第2区	3	須恵器	甕	130.0	7.1	-	外面平行タタキ。ココナデ。内面ココナデ。へうケナデ。	灰色	雲母・石英・長石	口縁部1/7残存	9世紀中葉。 新治窯跡群産

第5節 掘立柱建物跡

(1) 第1号掘立柱建物跡(SB01) (第24図)

位置 調査区中央部C-6、D-6区、標高17.2mの台地上に位置している。南西部が第3号竪穴建物跡SI03を掘り込んでいる。

規模・構造 検出された柱穴は4基である。桁行1間、梁行1間の側柱建物跡で、主軸方位はN-20°-Wの南北棟と推定される。柱間寸法は、桁行の間尺が異なり、南桁行は東間から2.3m、北桁間が東間から1.7mと幅があり、梁行は2.16mである。柱穴は4か所、深さは36.8～64.0cmで掘り方の断面形はほぼ平坦である。

所見 柱間が不規則であるが、規模から倉庫としての機能が想定される。時期は、出土遺物が無く不明であるが、覆土の状況から近世もしくは近世以降と考えられる。

第9表 柱穴計測値 (cm)

柱穴名	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
P1	45.0	43.0	64.0	円形
P2	39.0	36.0	57.8	円形
P3	46.00	33.0	36.8	不正円形
P4	45.0	45.0	56.3	円形

(2) 第2号掘立柱建物跡(SB02) (第24図)

位置 調査区東部D-7区、標高17.6mの台地上に位置している。北部が調査区域外に延びていることから、全容は不明である。

規模・構造 検出された柱穴は2基であるため、形式等については不明である。確認できる柱間は1.7mで梁行と推定される。主軸方位はN-22°-Eである。柱穴は2か所、深さは36～45.3cmで掘り方の断面形はほぼ平坦である。

所見 柱間が不規則であるが、規模から倉庫としての機能が想定される。時期は、出土遺物が無く不明であるが、覆土の状況から近世もしくは近世以降と考えられる。

第10表 柱穴計測値 (cm)

柱穴名	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
P1	41.0	40.0	45.3	円形
P2	46.0	46.0	36.0	円形

(3) 第3号掘立柱建物跡(SB03) (第24図)

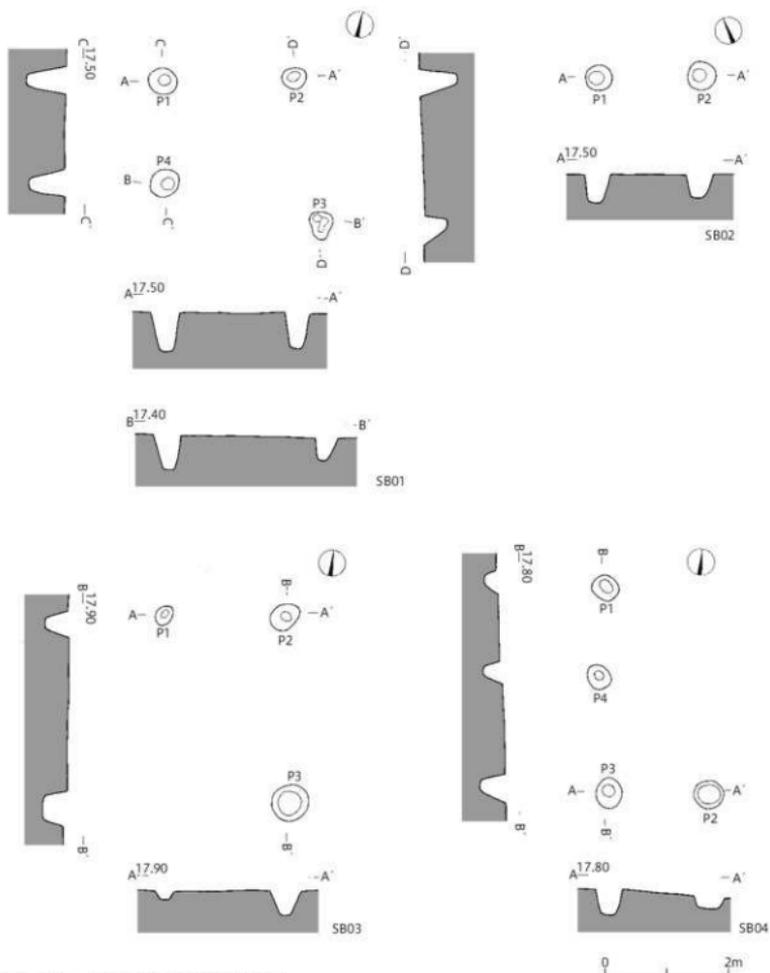
位置 調査区東部D-8区、標高17.7mの台地上に位置している。南西部が調査区域外に延びておりさらに、第2号竪穴建物跡SI02を掘り込んでいる。

規模・構造 検出された柱穴は3基である。桁行1間、梁行1間の側柱建物跡で、主軸方位はN-6°-Wの南北棟である。規模は、桁行の柱間は3.1mで、梁行の柱間は1.98mである。柱穴は3か所、深さは14.5～36.8cmで断面形はほぼ平坦を呈しており、平面形は円形である。柱のアタリは不明瞭でいずれの底面も皿状を呈している。

所見 柱間が不規則であるが、規模から倉庫としての機能が想定される。時期は、出土遺物が無く不明であるが、覆

第11表 柱穴計測値 (cm)

柱穴名	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
P1	35.0	27.0	14.5	円形
P2	50.0	40.0	36.8	円形
P3	60.0	56.0	33.3	円形



第24図 第1～4号掘立柱建物跡SB01-04実測図

土の状況から近世もしくは近世以降と考えられる。

(4) 第4号掘立柱建物跡(SB04) (第24図)

位置 調査区西部B-3, C-3区, 標高17.5~17.6mの台地上に位置している。東部が第1号溝跡SD01に掘り込まれている。

規模・構造 検出された柱穴は4基である。桁行2間, 梁行1間の側柱建物跡で, 主軸方位はN-7°-Wの南北棟である。規模は, 桁行1.5~1.7m, 梁行1.65mである。柱穴は4か所, 深さは17.5~41.4cmで掘方の断面形はほぼU字状を呈しており, 平面形は円形である。柱のアタリは, 不明瞭でいずれの底面も皿状を呈している。

所見 柱間が不規則であるが, 規模から倉庫としての機能が想定される。時期は, 出土遺物が無く不明であるが, 覆土の状況から近世もしくは近世以降と考えられる。

第12表 柱穴計測値 (cm)

柱穴名	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
P1	44.0	39.0	20.0	円形
P2	41.0	35.0	28.5	円形
P3	51.0	43.0	41.4	円形
P4	51.0	47.0	17.5	円形

(5) 第5号掘立柱建物跡(SB05) (第25図)

位置 調査区中央部C-5区に位置し, 標高17.0~17.4mの台地上に位置している。南部が調査域外に延びている。さらに第1・6・7号土坑(SK01・06・07)を掘り込んでいる。

規模・構造 検出された柱穴は6基である。桁2間, 梁行1間の側柱建物跡で, 主軸方位はN-2°-Eの南北棟である。規模は, 桁行が3.3m, 梁行の北妻2.6m, 南妻3.03mと幅があり平面上は台形を呈する。柱間寸法が, 東桁行は北間から1.8m, 1.5m, 西桁行は1.6mである。柱穴は6か所, 深さは17.5~62.8cmで掘り方の断面形はU字状を呈しており, 平面形は円形である。柱のアタリは, 不明瞭でいずれの底面も皿状を呈している。出土遺物として, 土師器2点(杯・甕1)が出土しているが小破片のため流れ込み遺物と判断した。

所見 柱間が不規則であるが, 規模から倉庫としての機能が想定される。時期は, 出土遺物として土師器破片が確認されたが, 土坑SK06(近世)を掘り込んでいることから近世以降と考えられる。

第13表 柱穴計測値 (cm)

柱穴名	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
P1	39.0	22.0	62.0	円形
P2	47.5	45.0p	62.8	円形
P3	41.0	40.0	50.0	円形
P4	43.0	43.0	17.5	円形
P5	58.0	45.0	36.0	楕円形
P6	46.0	39.0	32.0	円形

(6) 第6号掘立柱建物跡(SB06) (第25図)

位置 調査区西部B-2区に位置し, 標高17.7の台地上に位置している。北東部が調査域外に延びていることから, 全容は不明である。

規模・構造 検出された掘立柱は5基である。桁行3間, 梁行1間の側柱建物跡で, 主軸方位はN-13°-Wを指す。規模は, 桁行4.4m, 梁行2.3mである。柱間寸法は, 桁行が北から1.5m, 1.4m, 1.4mである。柱穴は5か所, 深さは24.5~88.8cmで掘方の断面形はほぼU字状を呈しており, 平面形は円形である。柱のアタリは, 不明瞭でいずれの底面も皿状を呈している。

所見 柱間が不規則であるが, 規模から倉庫としての機能が想定される。時期は, 出土遺物が無く不明であるが, 覆土の状況から近世もしくは近世以降と考えられる。

第14表 柱穴計測値 (cm)

柱穴名	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
P1	46.0	42.0	73.7	円形
P2	38.0	30.0	24.5	円形
P3	57.0	53.0	64.0	円形
P4	47.0	43.0	88.8	円形
P5	49.0	38.0	74.0	円形

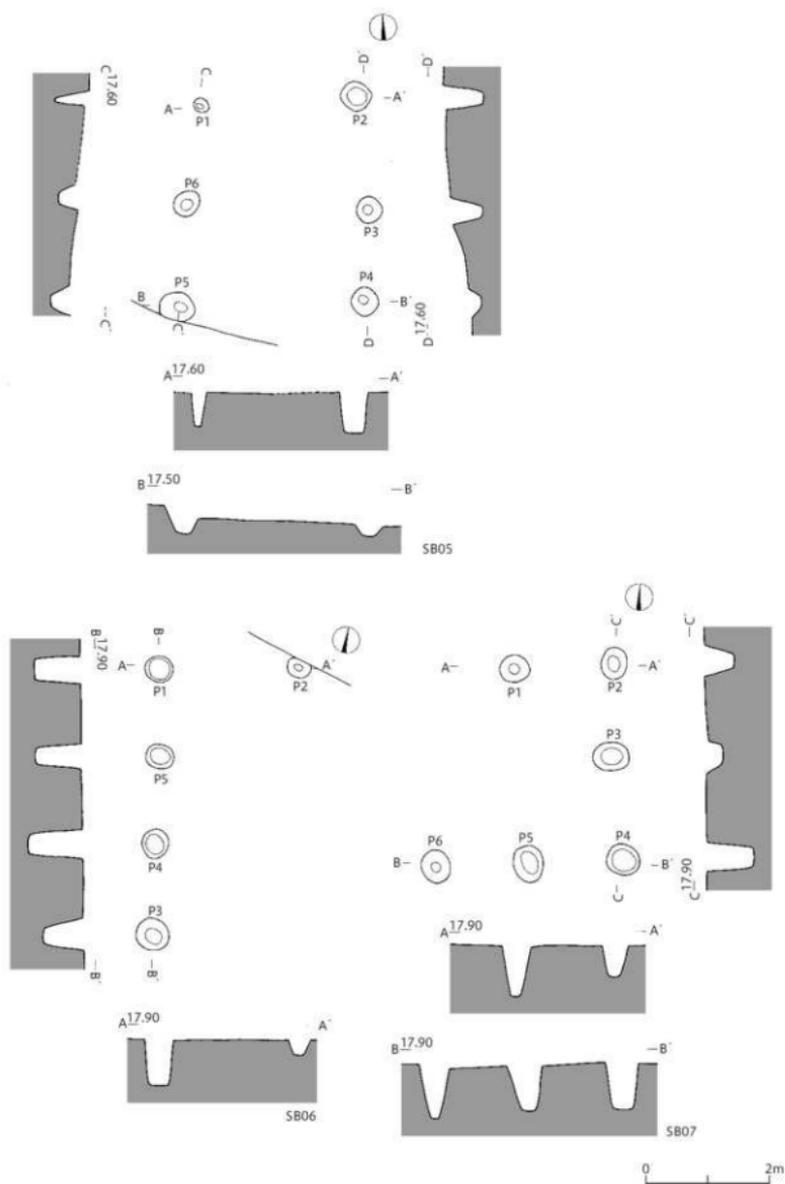
(7) 第7号掘立柱建物跡(SB07) (第25図)

位置 調査区中央部B-2区に位置し, 標高17.7の台地上に位置している。北東部が調査域外に延びている。

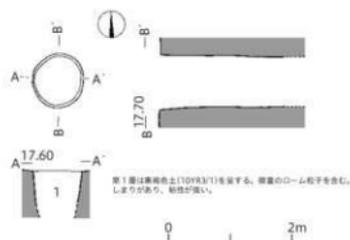
規模・構造 検出された掘立柱は6基である。桁行2間, 梁行2間の側柱建物跡で, 主軸方位はN-6°-Wを指す。規模は, 桁行3.25m, 梁行2.95mである。柱間寸法は, 桁行が北から1.5m, 1.7m, 梁行が1.4m, 1.55mであ

第15表 柱穴計測値 (cm)

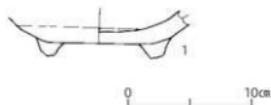
柱穴名	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考
P1	47.5	45.0	80.3	円形
P2	52.0	43.0	47.1	楕円形
P3	58.0	47.0	43.8	楕円形
P4	55.0	49.0	73.9	円形
P5	60.0	49.0	73.5	楕円形
P6	55.0	47.0	85.5	円形



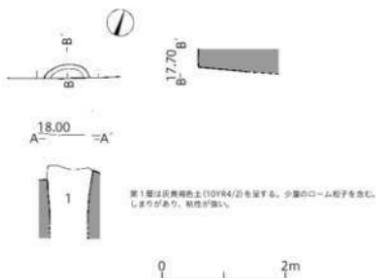
第25图 第5～7号掘立柱建物跡SB05～07実測図



第26図 第1号井戸跡SE01実測図



第27図 第1号井戸跡SE01出土遺物



第28図 第2号井戸跡SE02実測図

る。柱穴は6か所、深さは43.8～85.5cmで掘方の断面形はほぼU字状を呈しており、平面形は円形である。柱のあたりは、不明瞭でいずれの底面も皿状を呈している。

所見 柱間が不規則であるが、規模から倉庫としての機能が想定される。時期は、出土遺物が無く不明であるが、覆土の状況から近世もしくは近世以降と考えられる。

第6節 井戸跡

(1) 第1号井戸跡(SE01) (第26・27図)

位置 調査区中央部C-4区、標高は17.4mの台地上に位置している。

規模・構造 平面形は、長径0.88m、短径0.82mの円形を呈し、形状は円筒形で、確認面から2mほど掘り下げたのち、湧水のため下部の調査を断念した。覆土は、微量なローム粒子を含む黒褐色土の単一層で自然堆積であろう。出土遺物として、土師器1点(甕1)、須恵器1点(蓋1)、瓦質土器1点(浅鉢1)が出土している。うち図示できたのは瓦質土器の浅鉢底部破片で、1は三足脚が付く香炉状の浅鉢と考えられる。

所見 時期は、出土遺物のうち、瓦質土器浅鉢が中世後葉に比定されることから15世紀後半から16世紀代と考えられ

る。

第16表 SE01出土土器観察表

種類 番号	番号	種類	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第27図	1	瓦質土器	浅鉢	-	(4.0)	(8.0)	ロクロ成形,外面へう割り,内面へうラナデ。	灰黄褐色	黒色粒子・石英・長石	底部1/2残存	

(2) 第2号井戸跡(SE02) (第28図)

位置 調査区中央部C-3・4区, 標高は17.4mの台地上に位置している。南部の約半分が調査区域外に延びている。
規模・構造 平面形は, 長径0.72mの円形を呈するものと推定する。形状は円筒状で, 確認面から深さ80cm掘り込んだのち崩落のおそれがあることから, 下部の調査を断念した。覆土は, 微量なローム粒子を含む灰黄褐色土の単一層で自然堆積であろう。出土遺物は確認できなかった。

所見 遺物の出土はなく, 時期は明確ではないが, 第1号井戸跡(SE01)と形状が類似していることから中世後半から近世と考えられる。

第7節 溝跡

(1) 第1号溝跡(SD01) (第29・30図)

位置 調査区西部B-3, C-3区, 標高は17.4mの台地上に位置している。北端と南端はそれぞれ調査区外に延びており, 北部で第5号竪穴建物跡(S105)を掘り込んでいる。

規模・構造 北から南方向にかけて直線的に走る区画溝である。それぞれ両端部が調査区外に延びていることから全容は不明である。確認できる長さ10.83m, 上面幅0.86~2.15m, 底面幅0.14~0.37mである。底面までの深さは1.43~2.75mを測る。壁面は外傾して開き, 横断面形は断面V字状のいわゆる葉研堀を呈するものの, 部分的に逆台形状の箱葉研堀となる。主軸方向はN-22°Eを指す。最深部の標高は北端で17.72m, 最浅部は南端で17.63mを測る。その差は9cmで, ほぼ平坦である。

覆土は5層に分層でき, ローム粒子を含む自然堆積土であろう。出土遺物として, 土師器6点(環2・甕4), 須恵器8点(環4・甕4), 陶器4点(甕4)が出土している。うち陶器はいずれも中世常滑窯産の甕類体部破片である。

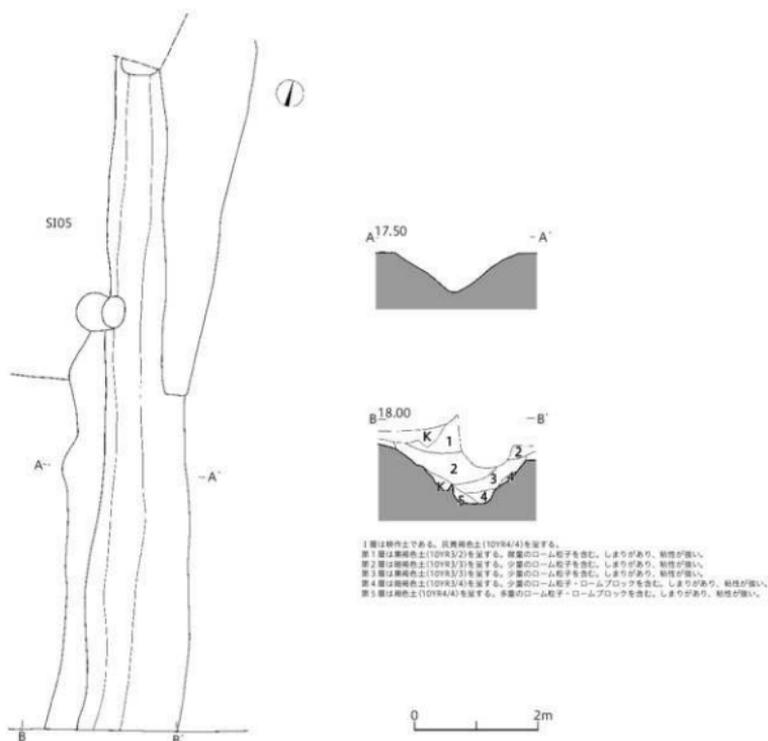
所見 時期は, 出土遺物の中に9世紀中葉の須恵器環の出土があるが, 中世常滑窯産の甕類体部破片がまとまって出土していることから判断して中世と考えられる。

第17表 SD01出土土器観察表

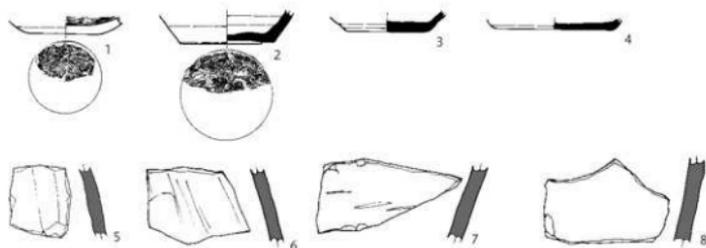
種類 番号	番号	種類	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第30図	1	土師器	坪	-	(1.5)	(6.0)	ロクロ成形, 底部回転糸切り, へう割り, 内面黒色処理, へうミガキ。	褐色	針状鉱物・石英・長石	底部1/3残存	
第30図	2	須恵器	坪	-	(2.7)	7.6	ロクロ成形, 底部回転糸切り, へう割り。	灰白色	石英・長石・黒色粒子	底部1/3残存	9世紀中葉, 木葉下葉跡群
第30図	3	須恵器	坪	-	(1.7)	6.8	ロクロ成形, 底部回転糸切り, へうラナデ。	灰色	雲母・石英・長石	底部1/2残存	9世紀中葉, 木葉下葉跡群
第30図	4	須恵器	坪	-	(0.9)	9.6	ロクロ成形, 底部回転糸切り。	灰色	針状鉱物・石英・長石	底部1/2残存	9世紀中葉, 木葉下葉跡群
第30図	5	陶器	甕類	-	-	-	内面へうラナデ, 輪葉, 外面へうラナデ。	にぶい褐色	石英・長石・黒色粒子	胴部破片	中世, 常滑系
第30図	6	陶器	甕類	-	(6.2)	-	内面へうラナデ, 外面へうラナデ。	褐色	石英・長石・黒色粒子	胴部破片	中世, 常滑系
第30図	7	陶器	甕類	-	(5.3)	-	内面へうラナデ, 外面へうラナデ。	赤褐色	石英・長石・黒色粒子	胴部破片	中世, 常滑系
第30図	8	陶器	甕類	-	(6.8)	-	内面へうラナデ, 外面へうラナデ。	にぶい赤褐色	石英・長石・黒色粒子	胴部破片	中世, 常滑系

(2) 第2号溝跡(SD02) (第31・32図)

位置 調査区中央部C-5区, 標高は17.5mの台地上に位置している。北端と南端はそれぞれ調査区外に延びており,

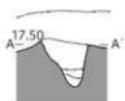
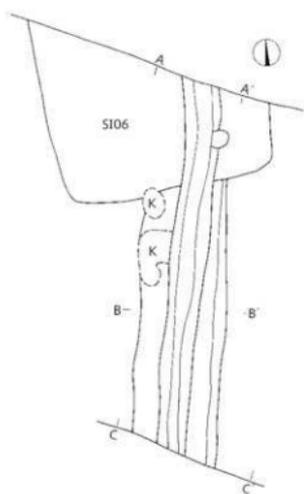


第29図 第1号溝跡SD01実測図

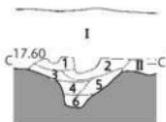
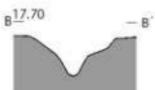


第30号 第1号溝跡SD01出土遺物



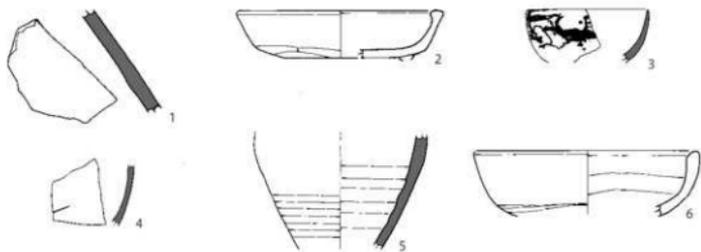


1層は耕作土である。黒褐色土(10YR4/2)を呈する。
 2層は耕作土である。黒褐色土(10YR3/1)を呈する。少量のローム粒子を含む。
 第1層は黒褐色土(10YR3/2)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第2層は黒褐色土(10YR3/2)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第3層は黒褐色土(10YR3/2)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第4層は黒褐色土(10YR4/2)を呈する。少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第5層は黒褐色土(10YR3/2)を呈する。少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
 第6層は黒褐色土(10YR3/1)を呈する。少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が強い。



0 2m

第31図 第2号溝跡SD02実測図



0 10cm

第32図 第2号溝跡SD02出土遺物

北部で第6号竪穴建物跡(S106)を掘り込んでいる。

規模・構造 北から南方向にかけて直線的に走る区画溝である。それぞれ両端部が調査区外に延びていることから全容は不明である。確認できる長さ6.02m、上面幅0.56～1.37m、底面幅0.16～0.22mである。底面までの深さは55.0cmを測る。壁面は外傾して開き、横断面形は断面V字状のいわゆる業研堀を呈する。主軸方向はN-7°-Eを指す。最深部の標高は北端で16.895m、最浅部は南端で16.905mを測る。その差は1cmで、平坦である。

覆土は6層に分層でき、ローム粒子を含む自然堆積土であろう。出土遺物として、瓦質土器2点(香炉1・風炉1)、陶器3点(壺1・碗1・壺1)、磁器1点(小碗1)が出土している。うち図示できたのは1の中世常滑窯産の甕破片、瓦質土器の香炉、風炉。近世瀬戸系灰軸陶器の碗、肥前窯産の小碗などである。

所見 時期は、出土遺物の中に中世常滑窯産の甕類破片が1点確認されているが、瀬戸系灰軸陶器碗や肥前系染付碗の出土があることから18世紀代と考えられる。

第18表 SD02出土土器観察表

神田 番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第328区	1	陶器	甕	-	0.4	-	ナデ。	にぶい 赤褐色	石英・長石	胴部破片	中世,常滑系
第328区	2	瓦質 土器	香炉	117.0	0.8	19.8	ロクロ成形,外面スス付着。	黒褐色	雲母・石英・長石	胴部1/10残存	中世後期～近世
第328区	3	磁器	小碗	110.0	4.3	-	ロクロ成形,染付草花文。	紋密・ 灰白色	灰白色・石英・長石	胴部1/4残存	17世紀,肥前系
第328区	4	陶器	碗	-	0.4	-	ロクロ成形,染付。	紋密・ 灰白色	石英・長石	胴部1/5残存	近世,瀬戸系, 灰軸
第328区	5	陶器	壺	-	0.3	-	ロクロ成形,鉄軸。	褐色	石英・長石	胴部1/5残存	産地不明
第328区	6	瓦質 土器	風炉	118.0	0.3	-	ロクロ成形。	褐色	雲母・石英・長石	胴部1/4残存	近世

第8節 土坑

(1) 第1号土坑(SK01) (第33・34区)

位置 調査区中央部C-5区、標高は17.4mの台地上に位置している。第5号掘立柱建物跡(SB05)に掘り込まれている。

規模・構造 粘土貼土坑である。規模は東西径1.18m、南北径1.1mの円形を呈し、検出面からの深さは最大31.5cmを測る。壁面は垂直気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で全体的に粘土が貼り付けられており、硬化している。また底面の壁に沿って幅3～6cmほどの溝が輪状に凹んでいる。

覆土は4層に分層でき、水平堆積であることから埋め戻されている。出土遺物として、土師質土器3点(小皿1)が覆土中層より確認された。

所見 時期は、出土遺物から近世と考えられる。底面の壁際を巡る細い溝は円形の樽などを据えた痕跡と判断される。墓塚の可能性がある。

第19表 SK01出土土器観察表

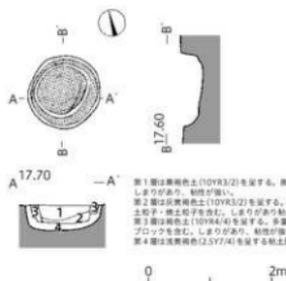
神田 番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第348区	1	土師質 土器	小皿	16.0	1.2	14.8	ロクロ成形。	浅黄色 褐色	石英・長石	体部1/3残存	

(2) 第2号土坑(SK02) (第35・36区)

位置 調査区中央部C-6区、標高は17.3mの台地上に位置している。

規模・構造 規模は、東西径1.06m、南北径0.78mを測り、東西に長い楕円形を呈し、長軸方位はN-90°を示す。また検出面からの深さは最大13.3cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は単一層であるが、埋め戻し土層と考えられる。出土遺物として、土師質土器7点(内耳罎2)が出土している。

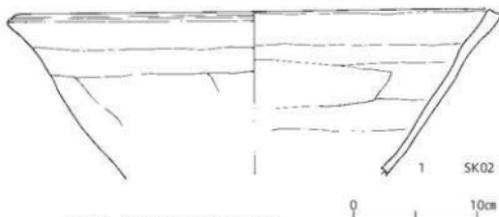


第1層は黒褐色土(10YR3/2)を呈する。断面のローム粒子を含有し、しまりがあり、粘性が強い。
 第2層は赤褐色土(10YR3/2)を呈する。少量のローム粒子・粘土粒・練土粒子を含有し、しまりがあり粘性が強い。
 第3層は黒褐色土(10YR4/4)を呈する。多数のローム粒子・ロームブロックを含有し、しまりがあり、粘性が強い。
 第4層は灰黒褐色土(2.5Y7/4)を呈する粘土層である。

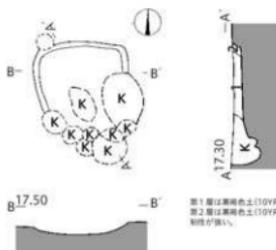
第33図 第1号土坑SK01実測図



第34図 第1号土坑SK01出土遺物

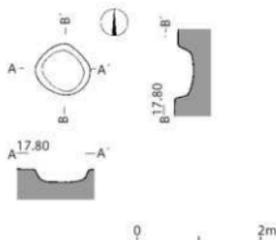


第36図 第2号土坑SK02出土遺物

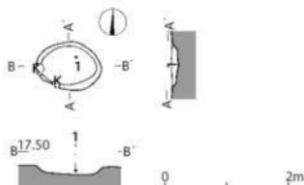


第1層は黒褐色土(10YR3/4)を呈する。少量のローム粒子を含有し、しまりがあり、粘性が強い。
 第2層は黒褐色土(10YR3/7)を呈する。少量のローム粒子・ロームブロックを含有し、しまりがあり、粘性が強い。

第37図 第3号土坑SK03実測図



第38図 第4号土坑SK04実測図



第1層は褐色土(10YR4/4)を呈する。少量のローム粒子を含有し、しまりがあり、粘性が強い。

第35図 第2号土坑SK02実測図



第39図 第4号土坑SK04出土遺物

所見 時期は、出土遺物から中世後葉の15世紀後半から16世紀と考えられる。

第20表 SK02出土土器観察表

検出 番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第38図	1	土師器 土器	内耳罎	140.0	113.5	-	外面ナデ、スス付着、内面ヘラナデ。	外面黒色 内面褐色	石英・長石・黒色粒子	口縁部1/5残存	

(3) 第3号土坑(SK03) (第37図)

位置 調査区東部C-6区、標高は17.2mの台地上に位置している。南部が多くの木根による攪乱を受けている。
規模・構造 規模は東西軸1.53m、南北軸1.38mを測り、隅丸方形を呈するものと推測される。また検出面からの深さは最大15cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。覆土は2層に分層でき自然堆積であろう。遺物は確認できなかった。

所見 時期は、遺物は出土していないが、覆土の状況から判断して中近世と考えられる。

(4) 第4号土坑(SK04) (第38・39図)

位置 調査区西部C-3区、標高は17.6mの台地上に位置している。

規模・構造 規模は東西径0.84m、南北径0.77mを測り、略円形を呈する。検出面からの深さは最大24.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で全体的に踏み固められ硬化している。覆土の観察はできなかった。出土遺物として、土師器2点(坯1)が出土している。

所見 時期は、出土遺物から9世紀後半と考えられる。

第21表 SK04出土土器観察表

検出 番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第38図	1	土師器	坯	13.4	65.0	7.6	底部下縁部にヘラケズリ、内面ヘラミガキ、黒色包埋。	浅黄褐色	炭母・黒色粒子・石英・長石	口縁部1/12残存	9世紀後半

(5) 第5号土坑(SK05) (第40・41図)

位置 調査区西部C-3区、標高は17.6mの台地上に位置している。

規模・構造 規模は東西径1.42m、南北径1.20mで、東西にやや長い楕円形を呈する。検出面からの深さは最大47cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で全体的に踏み固められ硬化している。覆土は2層に分層でき、多量のロームブロックが含まれることから埋め戻されている。出土遺物として、土師器2点(甕2)、須恵器2点(坯2)が出土している。うち図示できたのは須恵器坯で、1は口縁部を1cmほど打ち欠き灯明皿として転用されている。

所見 時期は、出土遺物から9世紀第4四半期と考えられる。底面の硬化及び転用灯明皿の出土位置が底面から31cm上層であることから墓塚と考えられる。

第22表 SK05出土土器観察表

検出 番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第41図	1	須恵器	坯	112.4	61.6	6.4	口縁部成形、底縁部にヘラ切り、ヘラ記号、内面スス付着。	灰白色	針状黒物・石英・長石・黒色粒子	口縁部打ち欠き	9世紀第4四半期、転用灯明皿

(6) 第6号土坑(SK06) (第42図)

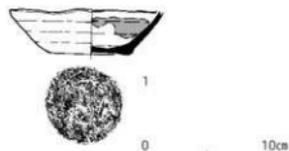
位置 調査区中央部C-5区、標高は17.4mの台地上に位置している。南西コーナー部で第7号土坑(SK07)によって掘り込まれている。

規模・構造 粘土貼土坑である。規模は、東西軸2.68m、南北軸1.84mの東西に長い長方形を呈する。主軸方位はN

第8節 土坑

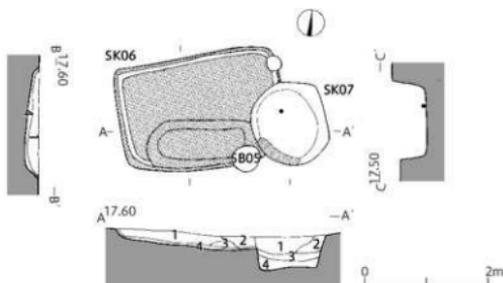


第1層は黄褐色土(10YR3/2)を呈する。多数のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
第2層は黄褐色土(10YR3/1)を呈する。多数のローム粒子-ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が強い。



第41図 第5号土坑SK05出土遺物

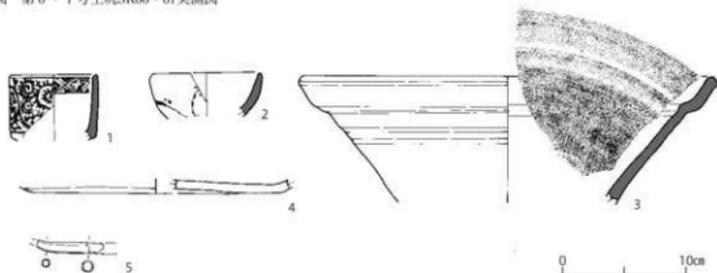
第40図 第5号土坑SK05実測図



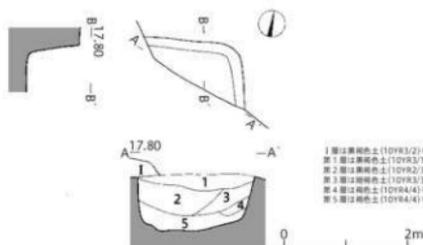
SK06
第1層は灰色、黄褐色土(10YR4/3)を呈する。少量のローム粒子、少量の焼土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
第2層は黄褐色土(10YR3/4)を呈する。少量のローム粒子、多数の焼土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
第3層は黄褐色土(10YR4/6)を呈する。多数のローム粒子、少量の焼土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
第4層は黄褐色土(10YR4/6)を呈する。粘土層である。

SK07
第1層は黄褐色土(10YR4/2)を呈する。少量のローム粒子を帯び含む。しまりがあり、粘性が強い。
第2層は黄褐色土(10YR3/2)を呈する。少量のローム粒子、少量のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が強い。
第3層は黄褐色土(10YR3/3)を呈する。多数のローム粒子、多数の焼土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
第4層は黄褐色土(10YR3/4)を呈する。多数のローム粒子、多数の焼土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。

第42図 第6・7号土坑SK06・07実測図



第43図 第7号土坑SK07出土遺物



1層は黄褐色土(10YR3/2)を呈する。多数のローム粒子を含む。
第1層は黄褐色土(10YR3/1)を呈する。少量のローム粒子、多数の焼土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
第2層は黄褐色土(10YR2/3)を呈する。少量のローム粒子、多数の焼土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
第3層は黄褐色土(10YR3/3)を呈する。少量のローム粒子、多数の焼土粒子を含む。しまりがあり、粘性が強い。
第4層は黄褐色土(10YR4/4)を呈する。多数のローム粒子、多数のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性が強い。
第5層は黄褐色土(10YR4/4)を呈する。多数のローム粒子、多数のロームブロック、多数の焼土粒子●●●●●●●●●●を含む。

第44図 第8号土坑SK08実測図

-72°-Eを示す。検出面からの深度は最大9.7cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は南方向に傾斜するもののほぼ平坦で全体的に粘土が貼り付けられており、硬化している。また底面の壁に沿って幅3～5cmほどの溝状の凹みが周回している。なお、南部には東西軸1.8m、南北軸0.88mの長方形の掘り込みがみられるが、粘土貼が施されていることから時間的な幅はなく同時期とみられる。

覆土は4層に分層でき、埋め戻されている。出土遺物として、須恵器1点(甕1)が出土している。流れ込み遺物と判断した。

所見 時期は、粘土貼土坑である第1号土坑(SK01)と同じ近世と考えられる。また底面の壁際を巡る細い溝は木板などを据えた痕跡と判断され、墓塚の可能性がある。

(7) 第7号土坑(SK07) (第42・43図)

位置 調査区中央部C-5区、標高は17.4mの台地上に位置している。西部で第6号土坑(SK06)を掘り込んでいる。
規模・構造 規模は、東西径1.37m、南北径1.19mの円形を呈する。検出面からの深さは最大47cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で全体的に踏み固められ硬化している。覆土は4層に分層でき、ほぼ水平堆積であることから埋め戻されている。出土遺物として、土師器2点(甕2)、須恵器2点(坏1・甕1)、土師質土器1点(大皿1)、陶器1点(播鉢1)、磁器2点(碗2)、金属器(煙管)が出土している。1は肥前系小碗・蛸唐草文。2の丸碗は草花文。3は瀬戸美濃系播鉢で鉄軸。5は煙管の破片である。

所見 時期は、出土遺物から18世紀から19世紀前半と考えられる。

第23表 SK07出土土器観察表

神岡 番号	番号	種類	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第42図	1	陶器	小碗	7.0	5.3	-	黄赤陶、ロクロ成形、染付黄赤陶蛸唐草文	灰白色	石英・長石	体部1/4残存	瀬戸美濃系
第42図	2	磁器	丸碗	9.0	3.6	-	丸碗、ロクロ成形、染付草花文	灰白色	石英・長石	体部1/4残存	備前系
第42図	3	陶器	播鉢	34.0	10.3	-	ロクロ成形、鉄軸、内面節目。	灰褐色	石英・長石	口径部1/6残存	瀬戸美濃系
第42図	4	土師質 土器	大皿	-	(1.1)	10.0	ロクロ成形、底部ヘラナデ。	浅黄褐色	石英・長石	底部1/5残存	近世

神岡 番号	番号	種類	計測値(cm) (g)				特 徴	材質	残存部位	備考
			長さ	幅	厚さ	重量				
第42図	5	煙管	5.4	0.97	0.12	5.6	吸口一枚板で成形。	銅	刃先一部欠損	

(8) 第8号土坑(SK08) (第44図)

位置 調査区西部C-3区、標高は17.6mの台地上に位置している。南部が調査区外に延びている。

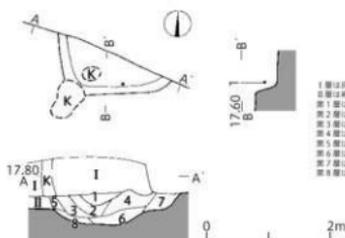
規模・構造 確認できるのは北東コーナー部分の三角隅のみで、東西軸1.45m、南北軸0.9mを測り、形状は方形を呈するものと推測できる。東西方向を主軸とする方位はN-88°-Eを示す。検出面からの深さは最大84.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で全体的に踏み固められ硬化している。覆土は5層に分層でき、ローム粒子やロームブロックを少量含み、いわゆるレンズ状堆積を呈する自然堆積土であろう。出土遺物として、土師器1点(甕1)、須恵器1点(坏1)が出土している。

所見 時期は、遺物は土師器と須恵器であるが、流れ込み遺物と判断した。覆土の状況から判断して中近世と考えられる。

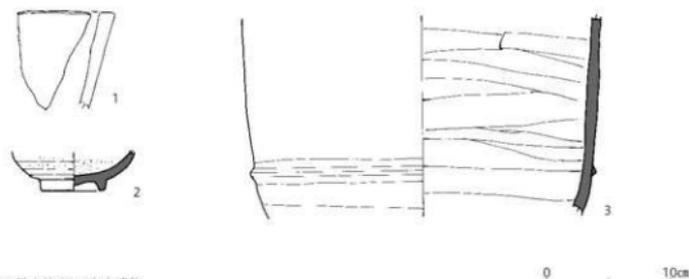
(9) 第9号土坑(SK09) (第45・46図)

位置 調査区中央部C-5区、標高は17.4mの台地上に位置している。北部が調査区外に延びている。

規模・構造 確認できるのは南西コーナー部分の三角隅のみで、東西軸1.18m、南北軸0.90mで、東西を主軸とする方位はN-84°-Eを示す。検出面からの深さは最大37.5cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は平坦で全体的に踏み固められ硬化している。覆土は8層に分層でき、ローム粒子やロームブロックを少量含み、いわゆるレン



第45図 第9号土坑SK09実測図



第46図 第9号土坑SK09出土遺物

ズ状堆積を呈する自然堆積土であろう出土遺物として、須恵器1点(甕1)、土師質土器2点(内耳鍋1)、瓦質土器1点(深鉢1)、陶器1点(碗1)が散在した状態で出土している。2は瀬戸美濃系陶、3は瓦質土器の深鉢である。いずれも近世に比定される。

所見 時期は、出土遺物から18世紀から19世紀と考えられる。

第24表 SK09出土土器観察表

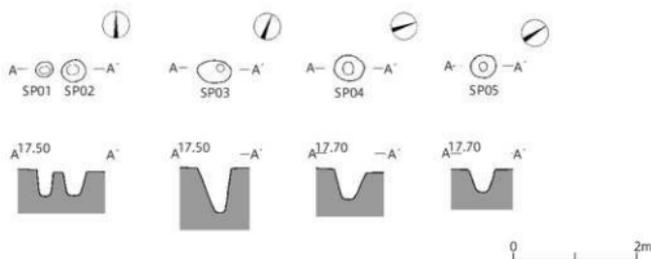
検出番号	番号	種類	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口徑	器高	底径					
第48図	1	土師質土器	内耳鍋	-	(8.3)	-	ヘラナデ、スス付着。	暗褐色	石英・長石	口縁部破片	15世紀後半～16世紀
第48図	2	陶器	小碗	-	(3.3)	5.0	ロクロ成形、灰施。	灰オリーブ色	石英・長石	底部のみ	18世紀～19世紀、瀬戸美濃系
第48図	3	瓦質土器	深鉢	-	(16.2)	(29.0)	外面ヘラナデ、ヘラ削り、突部粘付け。	灰色	針状鉱物・石英・長石	体部1/6	近世

第9節 ビット

(1) 第1号ビット(SP01) (第47図)

位置 調査区中央部C-6区、標高は17.3mの台地上に位置している。

規模・構造 規模は径27×25cmの円形を呈し、深さ39.5cmを測る。壁面は直立して立ち上がり、断面形はU字状であ



第47図 ビット実測図

り、柱あたりは確認できなかった。遺物の出土はない。

所見 時期は、遺物は出土していないが、覆土の状況から判断して中近世と考えられる。

(2) 第2号ビット (SP02) (第47図)

位置 調査区中央部C-6区、標高は17.3mの台地上に位置している。

規模・構造 規模は径37×35cmの円形を呈し、深さ38.3cmを測る。壁面は直立して立ち上がり、断面形はU字状であり、柱あたりは確認できなかった。遺物の出土はない。

所見 時期は、遺物は出土していないが、覆土の状況から判断して中近世と考えられる。

(3) 第3号ビット (SP03) (第47図)

位置 調査区中央部C-6区、標高は17.3mの台地上に位置している。

規模・構造 規模は径53×48cmの東西に長い楕円形を呈し、深さ73.3cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり断面形はU字状であり、柱あたりは確認できなかった。遺物の出土はない。

所見 時期は、遺物は出土していないが、覆土の状況から判断して中近世と考えられる。

(4) 第4号ビット (SP04) (第47図)

位置 調査区中央部C-5区、標高は17.5mの台地上に位置している。

規模・構造 規模は径49×42cmの円形を呈し、深さ44.5cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、断面形はU字状であり、柱あたりは確認できなかった。遺物の出土はない。

所見 時期は、遺物は出土していないが、覆土の状況から判断して中近世と考えられる。

(5) 第5号ビット (SP05) (第47図)

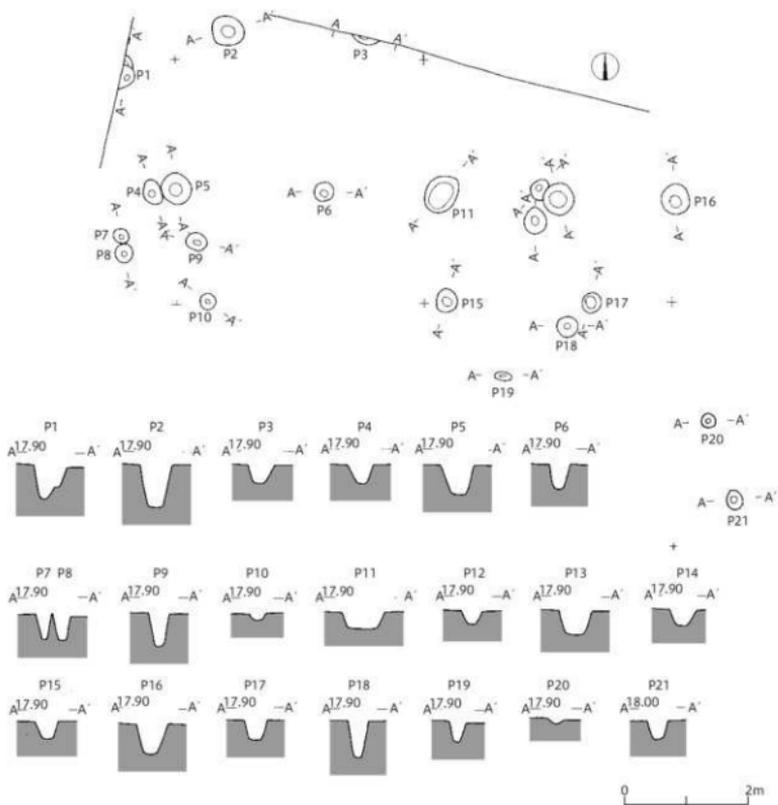
位置 調査区中央部C-5区、標高は17.5mの台地上に位置している。

規模・構造 規模は径40×37cmの円形を呈し、深さ37.8cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、断面形はU字状であり、柱あたりは確認できなかった。遺物の出土はない。

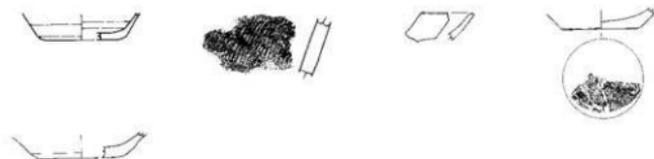
所見 時期は、遺物は出土していないが、覆土の状況から判断して中近世と考えられる。

第10節 ビット群

(1) 第1号ビット群(第48・49図)



第48図 ビット群実測図



第49図 ビット群出土遺物

位置 調査区西部B-2区、標高は17.7mの台地上に位置している。

規模・構造 南北8m、東西10mの長方形の範囲に21か所のピットが確認された。長径23～68cm、短径9～48.5cmの円形もしくは楕円形を呈し、深さ12.5～69.3cmで、断面形はU字状である。いずれも柱抜き取り痕は確認できず、覆土の締りは軟弱である。しかし、遺物の出土が認められるものがある。第6号ピット(Pit 6)では須恵器片が、また第16号ピット(Pit 16)では土師質土器皿の破片が確認され、前者が9世紀代、後者は中世で15世紀後半から16世紀に比定される。

所見 ピットの形状には規則性がなく、掘立柱建物跡あるいは柵跡として確認できないが、遺物の出土が認められるものについては時期が確定できるものの、その他は出土遺物がないため不明である。

第25表 ピット計測値(cm)

柱穴名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考	柱穴名	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	備考
P1	54.0	23.0	52.5	不正楕円形	P2	52.0	48.0	69.3	円形
P3	43.0	9.0	30.2	楕円形	P4	41.0	30.0	32.0	楕円形
P5	52.0	48.0	45.4	円形	P6	31.0	31.0	39.5	円形
P7	24.0	23.0	41.3	円形	P8	32.0	28.0	38.5	円形
P9	34.0	27.0	54.5	円形	P10	25.0	24.0	12.5	円形
P11	68.0	53.0	26.3	楕円形	P12	32.0	28.0	21.2	円形
P13	51.0	48.5	38.2	円形	P14	42.0	37.0	25.9	楕円形
P15	38.0	34.0	29.5	円形	P16	50.0	46.0	48.7	円形
P17	34.0	31.0	30.0	円形	P18	34.0	33.0	58.5	円形
P19	27.0	16.0	32.0	楕円形	P20	23.0	22.0	14.5	円形
P21	30.0	26.0	29.5	楕円形					

第26表 ピット出土土器観察票

神国 番号	番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
				口径	器高	底径					
第49回	1	須恵器	坏	-	(2.2)	(5.4)	ロクロ成形。	灰色	針状灰物・石英・長石	底部1/5残存	P6 9世紀
第49回	2	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タケ、内面ヘラナデ。	灰色	黒色粒子・石英・長石	胴部破片	P11 古代
第49回	3	土師質 土器	小皿	-	(2.2)	-	ロクロ成形、カワラケ。	褐灰色	石英・長石	底部1/5残存	P16 15世紀後半 ～16世紀
第49回	4	土師質 土器	小皿	-	(1.7)	-	ロクロ成形、カワラケ。	褐灰色	石英・長石	底部1/5残存	P16 15世紀後半 ～16世紀
第49回	5	土師質 土器	小皿	-	-	-	ロクロ成形、カワラケ。	褐灰色	石英・長石	胴部破片	P16 15世紀後半 ～16世紀

第4章 まとめ

今回の調査で、旧石器時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構及び遺物が確認された。旧石器時代は遺物のみであるが、遺構としては奈良・平安時代の竪穴建物跡6軒、土坑2基、ピットがあり、中・近世では、掘立柱建物跡7棟、井戸跡2基、溝跡2条、土坑7基とピット群がある。それらの変遷を図に表したものが第50図である。なお、主体となる奈良・平安時代については、出土遺物から集落形成の消長の期間幅をみた場合、8世紀中葉から9世紀後葉と時間幅が認められる。

その前後については遺物を含め明確な遺構は確認できなかった。以下では、各時代の様相について調査成果を概観し、まとめとしたい。

1) 旧石器時代

当該期の遺構は確認していないが、調査区中央部で検出された第6号竪穴建物跡覆土上層からメノウ製の使用痕のある剥片が1点出土した。この石器は、編年上茨城編年のIIc期に比定され、立川ローム層IV層に相当するといわれており、ナイフ形石器を主体とする石刃石器群に帰属すると考えられる。当調査区の基本土層の観察では第4層(第7図)に当たるものと考えられる。また石材は県北部で産出する在地の赤メノウである。わずかに1点とはいえ旧石器時代の遺物は、当遺跡の初見となるもので、今後の調査における資料の追加が期待される。

2) 奈良・平安時代

当該期の遺構は、竪穴建物跡6軒、土坑2基とピットの一部が相当し、調査区のほぼ全域に広がっていた。竪穴建物跡は、全て調査区外に延び、しかも中世以降の遺構によって掘り込まれ、さらに後世の擾乱を受けるなど完掘できたものは皆無であった。しかし、部分的な調査にとどまっている例が多いとはいえ、各竪穴建物跡からは遺物が出土し、帰属時期を確定することは可能であった。確認された時期は8世紀中葉から9世紀後葉と1世紀以上にわたるため、以下では時期ごとに調査区内における竪穴建物跡の変遷について再確認しておきたい。

なお、竪穴建物跡の規模については差が認められ、ひたしな市武田遺跡群の古墳時代の竪穴建物跡の規模についての分類(稲田 2010)を適用して分類したい。具体的には床面積が16㎡未満のものを小規模、16㎡～36㎡を中規模、36～49㎡を大規模、49㎡以上を特大規模とする。

8世紀中葉 第5号竪穴建物跡(S105)が相当する。一部調査区外へと延びているため完掘されたものではないが、7.31m×6.83mと東西にやや長い方形を呈する。床面積は49.92㎡であり、この時期の竪穴建物としては特大規模の建物に分類可能である。北辺にカマドを持ち、四隅から中央にかけての位置に主柱穴4本、カマドと対面する南辺中央の壁際に梯子穴を伴う。出土遺物もまとまっており、土師器は坏、甕があり、須恵器は坏をはじめ、盤、蓋、短頸瓶、甕、甗がある。須恵器のうち坏・盤・蓋はいずれも木葉下窯跡群産であり、甗は新治窯跡群産である。これらは8世紀第2～第3四半期に比定される。

8世紀後葉 第1号竪穴建物跡(S101)が相当する。遺構の半分が調査区外へと延びており、完掘されたものではないが、一辺4.13mの方形で、北辺にカマドが設置されているが、柱穴は確認できなかった。床面積は17.05㎡であり、中規模の建物に分類可能である。出土遺物については、土師器は甕しか確認されていないが、須恵器はまとまっており、とくに坏が多い。その他、有台坏、盤がある。須恵器はいずれも木葉下窯跡群産で、8世紀第3～4四半期に比定される。なお、須恵器坏底部の調整は、回転ヘラ切り、もしくはヘラ切りの後手持ちヘラケズリによって整形されている。また金属製品として鉄製刀身の出土がある。刃部・茎部ともに折損している。

9世紀前葉 第2号竪穴建物跡(S102)、第4号竪穴建物跡(S104)が相当する。他の竪穴建物跡と同様、遺構の一部は調査区外へと延びており、あるいは擾乱を受けているため完掘されたものではないが、第2号竪穴建物跡が一辺3.9m、第4号竪穴建物跡が一辺3.8mの方形で、それぞれの床面積は15.21㎡、14.44㎡であることから、小規模の建物に分類される。カマド及び柱穴が確認できたのは第2号竪穴建物跡であり、出土遺物もまとまっている。土師器は坏と甕であるが、須恵器は坏、有台坏、盤で木葉下窯跡群産である。時期は、9世紀第2四半期に比定され、使用頻度の

高いものがみられた。また、第4号竪穴建物跡出土遺物も図示した須恵器有台坏、甗は木葉下窯跡群の製品で9世紀前半に比定される。

9世紀中葉 第3号竪穴建物跡(SI03)、第6号竪穴建物跡(SI06)が相当する。いずれも調査区外へと延びており、発掘したものはない。第3号竪穴建物跡が一辺3.27m、第6号竪穴建物跡が一辺3.51mの方形で、それぞれの床面積は10.69㎡、12.32㎡であることから、小規模の建物に分類される。まず第3号竪穴建物跡はカマドをはじめ柱穴が確認できなかった。出土遺物も少ないもの、図示した須恵器坏は木葉下窯跡群産で、9世紀第四半期に比定されるものである。第6号竪穴建物跡では須恵器坏、有台坏、甗(もしくは鉢)の口縁部片が出土しており、いずれも木葉下窯跡群産で、坏と甗(鉢)は9世紀中葉(第3四半期)に比定される。有台坏は9世紀前半の製品であるものの、底部に転用痕としての再利用の痕跡が認められる。

9世紀後葉 第4号土坑(SK04)、第5号土坑(SK05)が相当する。竪穴建物跡は確認できなかった。第4号土坑は径0.8m、深さ0.24mの円筒形の土坑で、覆土から土師器坏の破片が出土しているが、性格は不明である。一方、第5号土坑は径1.42m×1.2m、深さ0.47mの円筒形の土坑で、底面から0.31mの覆土上層中より口唇部を1cmほど粗く打ち欠いた須恵器坏が確認された。いわゆる灯火器(具)として分類される灯明皿で、内面に薄黒色を呈した煤の付着がみられる。灯明皿は坏(皿)を二枚重ねて使用するが、当例は内面に煤が付着していることから下皿であろう。なお、出土位置がやや上層であることから墓壇に置かれたものと推定される。時期は9世紀第4四半期に比定される。

以上が奈良・平安時代の遺構の変遷であるが、調査区が東西に長く、南北に狭いため、集落の全容を解明するには至らなかった。しかしながら、遺構の時期や平安時代に向かって竪穴建物跡の床面積の規模が縮小していく傾向や9世紀後葉には竪穴建物跡の構築がみられないなど、おおまかな特徴を示すことはできたと思う。今後、隣接地や周辺における同時期の遺構等の分布も把握することで、集落の成立時期や発掘時期、時期ごとの集落規模などより詳細な集落の解明に向けて努めていく必要があり、今後の課題としたい。

3) 中・近世

当該期に相当する明確な遺構としては、遺物の出土みられる井戸跡・溝跡・土坑およびピット群の一部である。ここで中世と判断できる遺構・遺物について触れたい。まず第1号井戸跡(SE01)である。井筒をもたない素掘り井戸で、径80cmほどの小型円形を呈する。確認面から垂直に近い角度で掘り込まれており、覆土から瓦質土器である三足脚が付く香炉型の浅鉢が出土している。15世紀後半から16世紀に比定される。また調査区西部で北西から南東にかけて走る第1号溝跡SD01は、断面V字状に近いいわゆる菜研堀を呈し、確認面10mほどの検出区間においてほぼ直線的であることから区画溝と推測した。覆土中から平安時代の須恵器が出土しているが、中世常滑窯産の甗部破片が確認されており、中世の所産と判断した。但し細部の編年については確認できなかった。また土坑では第2号土坑(SK02)がある。径1m前後の楕円形土坑で、覆土から土師質土器内耳鍋の大型破片が出土している。15世紀後半から16世紀に比定される。

次に近世である。当該期の遺構として注目したいのは、粘土貼土坑をはじめとする土坑である。第1号土坑(SK01)は径1mほどの円形で、底面に白色粘土が貼り付けられ、その壁際に細い溝が輪状に凹んでいることから桶底の痕と推定された。遺体の収納容器である桶形木棺が埋設されていたものである。同じ粘土貼土坑として第6号土坑(SK06)がある。規模は2.68×1.84mの長方形で、やはり底面に粘土が貼られ、壁際に溝状の凹みが周回しており、板箱の底痕と推定され直方体箱式木棺と推定された。かなり大型を呈していることから寝棺と考えられる。こうした粘土貼を伴わないが第7号土坑(SK07)は径1m強の円形土坑である。覆土中に陶磁器・煙管などが出土しており、18～19世紀前半である。おそらく直葬土壇ではなく桶形木棺に収納されていたことが推測される。また第9号土坑(SK09)は約半分が調査区外に延びているものの、一辺1m強の方形土坑である。覆土中に陶器や瓦質土器などが出土しており、18～19世紀前半の遺構である。これも墓壇と考えられ、立方体箱式木棺と推定できる。遺物は土師器・須恵器が出土しているものの、第8号土坑(SK08)も同様な性格をもった遺構であろう。こうしてみると当該調査区は近世において墓域であったことが推測される。

今回の調査区では、旧石器時代の遺物の発見があり、奈良・平安時代の集落跡、中世における居住域、近世の墓域を確認することができた。周辺の調査において、とくに奈良・平安時代の集落跡が良好な状況で遺存していることが判明しており、その一部を明らかにすることができた。また中世や近世においても遺構・遺物が確認できたことは大きな成果であった。これら調査成果が、当地域の歴史解明の一助なることが期待される。

(大淵・遠藤・小川)

参考・引用文献

- 秋元吉郎校注 1958 「常陸国風土記」『風土記』日本古典文学大系2 岩波書店
- 伊東重敏 1976 「大六天古墳(森戸古墳群第12号墳)」茨城県東茨城郡常澄村教育委員会
- 井上義安 1985 「水戸市下細道跡 市道酒門8号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市教育委員会
1994 「水戸市大串道跡 市道常澄8-1495号線埋蔵文化財発掘調査報告書」茨城県水戸市
1998 「伊豆屋敷跡確認調査報告書 墓地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸地方埋蔵文化財研究会
- 井上義安・金子浩正 1996 「水戸市大串道跡 常澄中学校増改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」茨城県水戸市
- 井上義安・千葉隆司 1995 「水戸市北屋敷古墳 市道常澄7-0057号線埋蔵文化財発掘調査報告書」茨城県水戸市
- 石川太郎・川口武彦・窪田恵一 2016 「部会発表7 石器石材からみる後期旧石器時代・縄文時代草創期の交易・交流—常総地域を中心に—」『茨城県考古学協会シンポジウム 考古学からみる茨城の交易・交流』茨城県考古学協会
- 稲田健一 2010 「古墳時代の武田遺跡群」『武田遺跡群 総括・補遺編』ひたちなか市教育委員会・財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 太田有里乃・土生朗治 2015 「小原遺跡(第3地点) 都計道7・6・1号外3路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市教育委員会
- 小川和博・大淵淳志・川口武彦・木本孝周・渥美賢吾・関口慶久・株式会社京都科学 2008 「大串道跡(第7地点)—介護老人保健施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」水戸市教育委員会
- 櫻村宣行 1995 「一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 梶内遺跡」財団法人茨城県教育財団
- 川口武彦 2005 「水戸市下入野町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第27号 婆良岐考古同人会
2008 「水戸市百合ヶ丘町出土の神子柴型尖頭器」『婆良岐考古』第30号 婆良岐考古同人会
- 川口武彦・小川和博・大淵淳志 2002 「水戸市元石川町所在 小仲根遺跡発掘調査報告書」水戸市教育委員会
- 川崎純徳・鈴木泰行・吹野富美夫 1986 「大串貝塚」常澄村教育委員会
- 齋藤 洋・米川暢哉 2016 「小原遺跡(第16地点) 都市計画道路7・6・1号線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」水戸市教育委員会
- 常澄村史編さん委員会編 1989 「常澄村史」常澄村
- 中山信名 1979 「新編常陸国誌」宮崎報恩会
- 橋本勝雄 2002 「茨城県における旧石器時代の編年」『茨城県における旧石器時代研究の到達点—その現状と課題—発表要旨・資料集』茨城県考古学協会
- 水戸市教育委員会 1999 「水戸市埋蔵文化財分布調査報告書(平成10年度版)」

写真図版



1. 航空写真(北から)



2. 航空写真(北から)



1. 調査区遠景(北から)



2. 調査区近景(東から)



1. 調査区完掘状況(西から)



2. 基本層序PG 1(南から)



1. 第1号竪穴建物跡(SI01)
完掘状況(南から)



2. 第1号竪穴建物跡(SI01)
カマド完掘状況(南から)

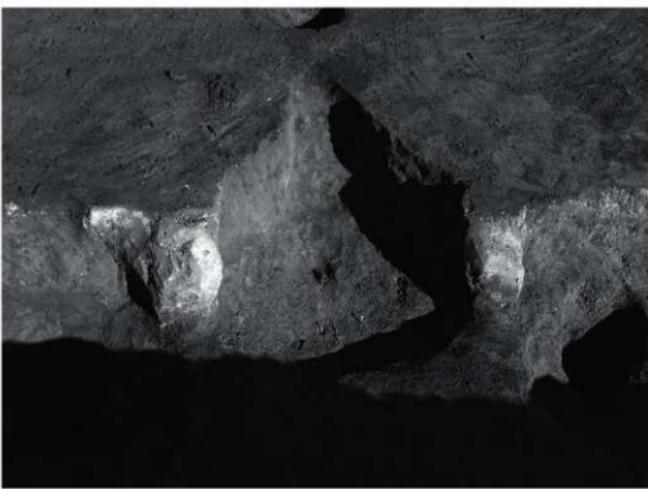


3. 第1号竪穴建物跡(SI01)
遺物出土状況

1. 第2号竪穴建物跡(S102)
完掘状況(南から)



2. 第2号竪穴建物跡(S102)
カマド完掘状況(南から)



3. 第2号竪穴建物跡(S102)
遺物出土状況





1. 第3号竪穴建物跡(S103)
完掘状況(南から)



2. 第3号竪穴建物跡(S103)
遺物出土状況



3. 第3号竪穴建物跡(S103)
遺物出土状況

1. 第4号竪穴建物跡(S104)
完掘状況(南から)

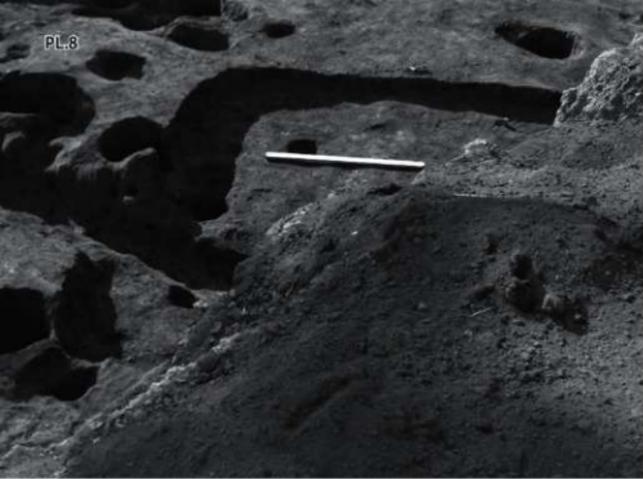


2. 第5号竪穴建物跡(S105)
完掘状況(東から)



3. 第5号竪穴建物跡(S105)
遺物出土状況





1. 第6号竪穴建物跡(S106)
完掘状況(東から)



2. 第1号掘立柱建物(SB01)
完掘状況(南から)



3. 第2号掘立柱建物(SB02)
完掘状況(西から)

1. 第3号掘立柱建物(SB03)
完掘状況(西から)



2. 第4号掘立柱建物(SB04)
完掘状況(南から)



3. 第5号掘立柱建物(SB05)
完掘状況(西から)





1. 第1号井戸跡(SE01)完掘状況
(南から)



2. 第2号井戸跡(SE02)完掘状況
(北から)



3. 第1号溝跡(SD01)完掘状況
(南から)

1. 第2号溝跡(SD02)完掘状況
(南から)



2. 第1号土坑(SK01)完掘状況
(東から)



3. 第2号土坑(SK02)完掘状況
(東から)





1. 第3号土坑(SK03)完掘状況
(東から)



2. 第4・5・8号土坑(SK04・05・08)完掘状況(北から)

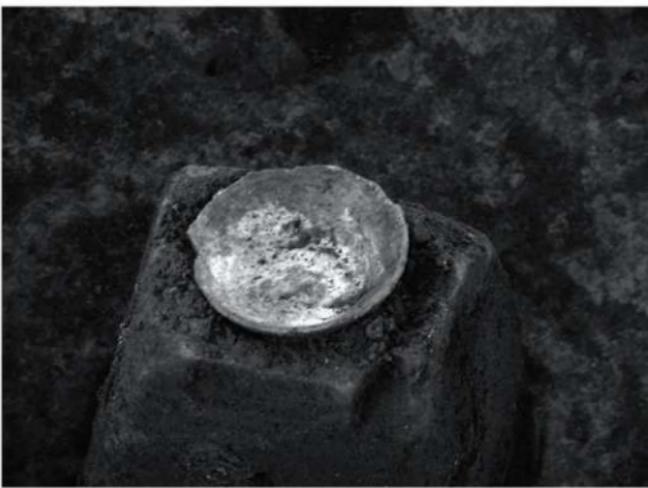


3. 第4号土坑(SK04)完掘状況
(北から)

1. 第5号土坑(SK05)完掘状況
(南から)



2. 第5号土坑(SK05)遺物出土状況



3. 第6号土坑(SK06)完掘状況
(東から)





1. 第7号土坑(SK07)完掘状況
(東から)



2. 第8号土坑(SK08)完掘状況
(南から)



3. 第9号土坑(SK09)完掘状況
(南から)



1. 第9号土坑(SK09)遺物出土状況



2. ビット群完掘状況(西から)



1. 第6号竖穴建物跡(SI06)出土旧石器



2. 第1号竖穴建物跡(SI01)出土遺物



1



2



3



4



6



7



18



9



10

3. 第1号竖穴建物跡(SI01)出土遺物

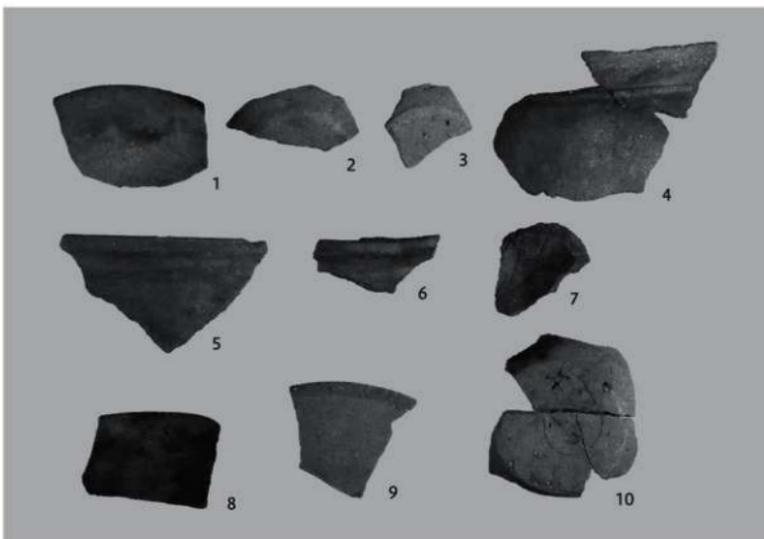


11

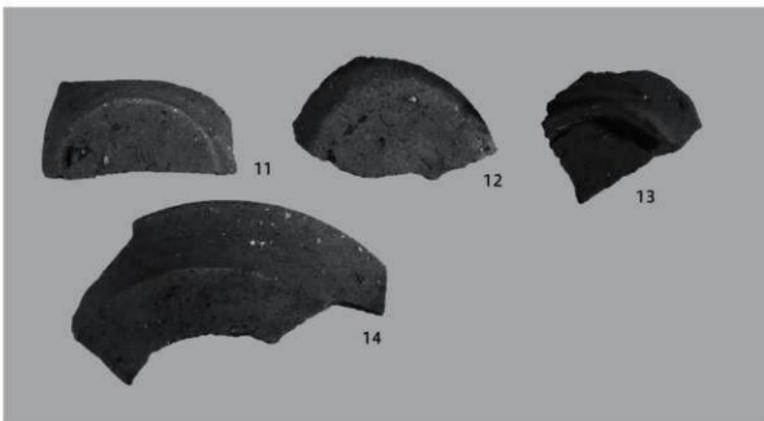
4. 第1号竖穴建物跡(SI01)出土遺物



1. 第2号竖穴建物跡(S102)出土遺物



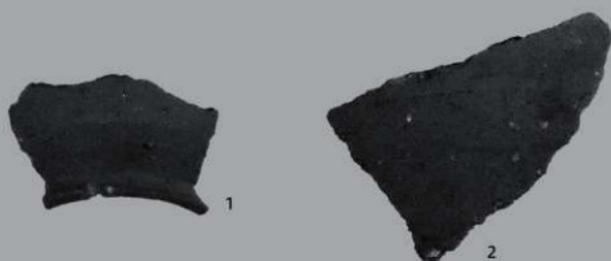
2. 第2号竖穴建物跡(S102)出土遺物



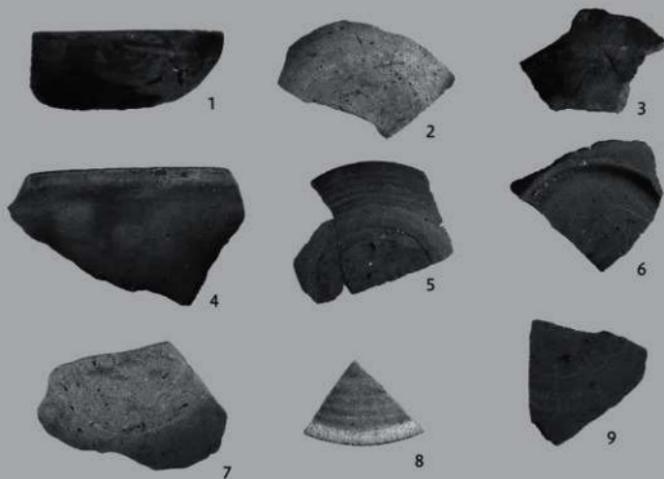
3. 第2号竖穴建物跡(S102)出土遺物



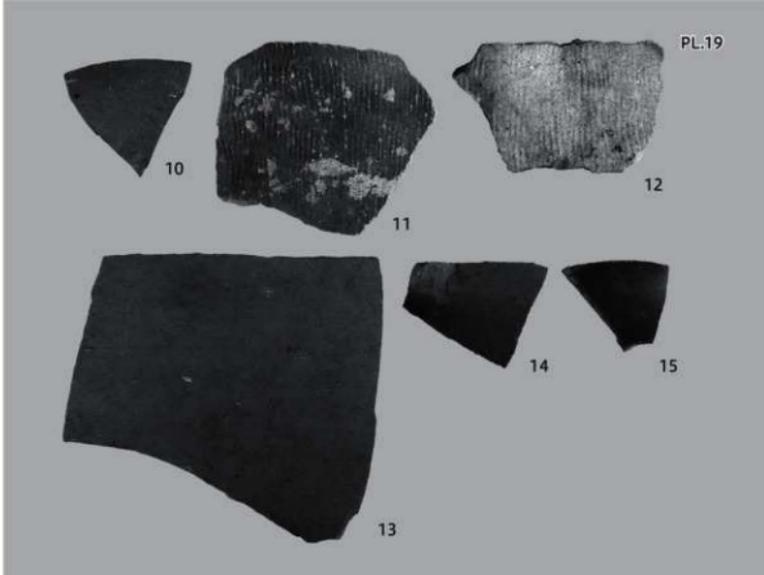
1. 第3号竖穴建物跡(SI03)出土遺物



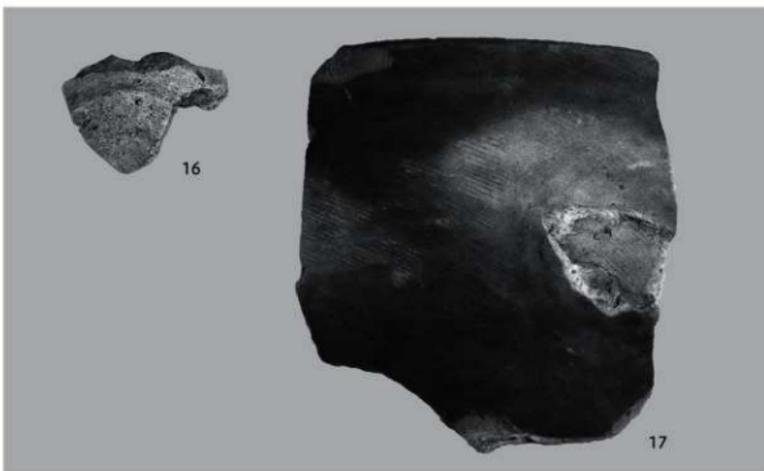
2. 第4号竖穴建物跡(SI04)出土遺物



3. 第5号竖穴建物跡(SI05)出土遺物



1. 第5号竖穴建物跡(SI05)出土遺物



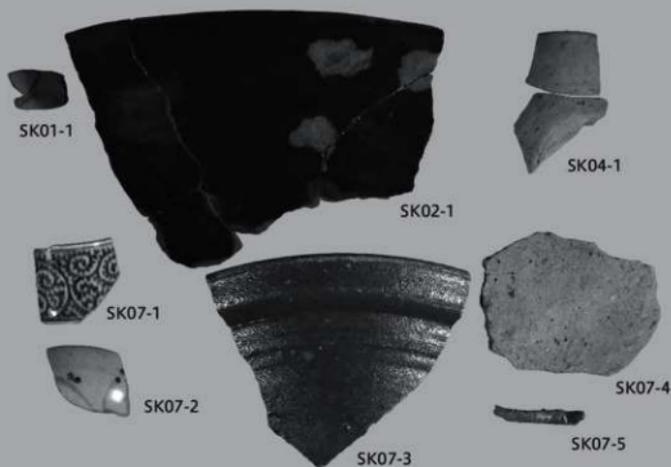
2. 第5号竖穴建物跡(SI05)出土遺物



3. 第6号竖穴建物跡(SI06)出土遺物



1. 第1号井戸跡(SE01)、第1・2号溝跡(SD01・02)出土遺物



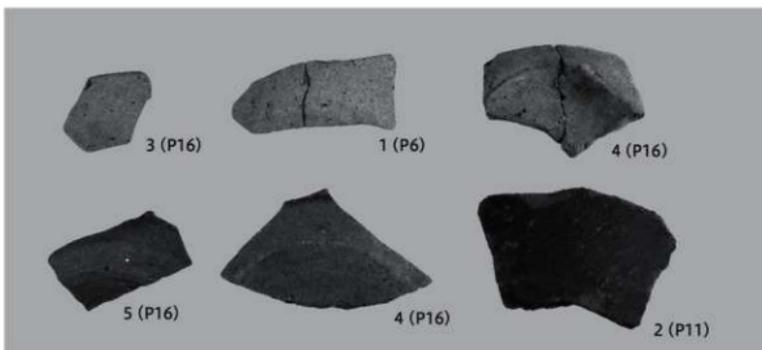
2. 第1・2・4・7号土坑(SK01・02・04・07)出土遺物



1. 第5号土坑(SK05)出土遺物



2. 第9号土坑(SK09)出土遺物



3. ピット(Pit)群出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とうまえはらいせき (だいはちてんだいにじ)							
書名	東前原遺跡 (第8地点第2次)							
副書名	区画道路6-22号外1路線道路改良及び流域関連下水道事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告							
編著者名	橋本勝雄 小川和博 大淵淳志 遠藤啓子 大淵由紀子 大野美佳 太田有里乃 米川暢敬							
編集機関	有限会社 日考研茨城 〒300-0508 茨城県稲敷市佐倉3321-1 TEL.029-892-1112							
発行機関	水戸市教育委員会 〒310-0852 茨城県水戸市笠原町978-5(歴史文化財課) TEL.029-306-8132							
発行年月日	平成28 (2016) 年3月29日							
収録遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東前原遺跡 第8地点 第2次	茨城県水戸市東前町 1118-1, 1118-2, 1119-1, 1119-3, 1120, 1122-1番地	201	259	36度 34分 03秒	140度 52分 69秒	20151222 ～ 20160120	677.0㎡	区画道路6-22号外 1路線道路改良及び 流域関連下水道工事 に伴う発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
東前原遺跡 第8地点 第2次	集落跡	旧石器時代 奈良・平安時代 中・近世		竪穴建物跡 掘立柱建物跡 溝跡 井戸跡 土坑 ピット		6軒 7棟 2条 2基 9基 1基		使用痕のある剥片、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器、鉄製品(煙管・刀子)
要約	今回の調査区は第1次調査の南側の部分であり、周辺と同様に台地北縁部に立地する奈良・平安時代の竪穴建物跡が検出された。集落跡がさらに南に拡がることか確認され、拠点的な集落になることが確実である。また、中近世期の円形土坑及び方形土坑が検出されているが、いずれも墓塚と推定される。那珂川流域における古代集落跡及び中近世の墓塚が伺える貴重な資料群である。							

水戸市埋蔵文化財調査報告 第79集

東前原遺跡

(第8地点第2次)

区画道路6-22号外1路線道路改良及び流域関連下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成28(2016)年3月29日

編集・発行 水戸市教育委員会

〒310-0832 茨城県水戸市笠原町978-5

TEL 029-306-8132

有限会社 日考研茨城

〒300-0508 茨城県稲敷市佐倉3321-1

TEL 029-892-1112

印刷・製本 有限会社 田辺印刷

〒298-0123 千葉県いすみ市瑪谷663-4

TEL 0470-86-2288